

教師として成長し続けるために

若手の先生に贈る20のメッセージ



横浜国立大学教育人間科学部附属
教育デザインセンター

はじめに

横浜国立大学教育人間科学部

学部長 小野康男

今、学校教育は、社会から期待されていると同時に、厳しく見られている面もあります。それは、教師に対しても同じです。

大学を卒業して教師になっても、すぐにうまく授業ができるとは限りません。なぜなら、教師は児童生徒と一緒に、成長しながら「教師になっていく」ものであるからです。まさに、「子どもと共に教師は成長し続ける」と言ってもよいでしょう。

そう考えたとき、教員養成を担う大学の使命も明らかになってきます。それは、生涯にわたって学び続ける人材、しかも子どもたちと共に学び続ける人材を育成することです。そのためには学生に、学校現場の実情や子どもたちの姿を、具体的・実感的に理解させることが大切です。

教育人間科学部では、文部科学省特別経費「教育デザインセンターをハブとした都市型総合大学における教員養成システムの構築」という5か年計画の事業に、本年度より取り組むことといたしました。この事業においては、実践的指導力育成のための評価基準である「横浜スタンダード」の作成や、学部・大学院における教員養成に向けた一貫カリキュラムの開発、モデル教室の構築とそれを用いた授業シミュレーションなどに取り組んでまいります。

その事業の一環として編纂されたのが本書です。

本書は、学生や大学院生のテキストとして活用することも視野に入れてはおりますが、直接的には現職の教師に向けたメッセージとなっております。

各地の教育委員会や学校においては、従前以上に、現職教育に力を入れておられると聞きました。変化の激しい時代にあって、経験に頼るだけの教育では次々と押し寄せてくる課題に対応できないことが明らかになってきたからでしょう。これからの教師には、時代の変化を見据え、常に自己変革をしていくという、新しい専門性が求められています。そうした時代にあって、これからを生きる教師を育成していくためには、大学教育と現職教育の二方向からの、しかも双方が連携しての取り組みが必要であると考え、この冊子を作成いたしました。つまりこの冊子を、大学教育と現職教育の架け橋にしたいと考えたのです。

本書が、多くの先生方や学生の皆さんにご愛読いただけること、そして読んでくださった皆さんの、教師としての力量形成や意欲の向上に少しでも役立ってくれることを、心より願っております。

末筆ながら、本書の編集・発行に当たり多大なご尽力を賜りました、神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市・横須賀市はじめ各地の教育委員会と、「現職教師の声」欄に玉稿を賜りました多くの現職の先生方、また横浜国立大学教育人間科学部の教職員の皆様に、衷心よりお礼申し上げます。

目次

はじめに	1
目次	2
活用の手引き	3
コラム	4

第1章

ライフステージに応じて求められるマネジメント能力を身に付けるために

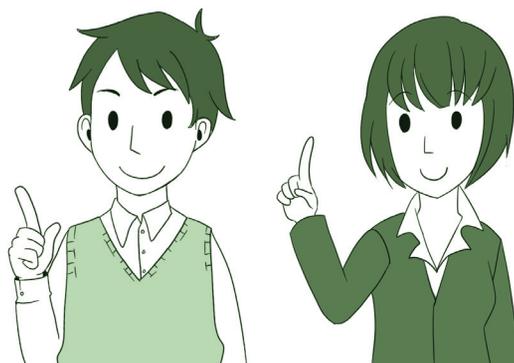
学校を歩いてみよう ～校内は自分を育てる教材の宝庫～	6
10年後の自分をイメージしよう ～目標をもつことが向上への第一歩～	8
進んで質問したり、相談したりしよう ～先輩職員はそれを待っている～	10
先輩教師に授業を見ていただく ～子どもたちとあなた自身の成長のために～	12
学校づくりに参加しよう ～会議で発言し、自分を高めていく～	14
優れた実践をまねてみよう ～「学ぶ」ことは、「まねる」ことでもある～	16
授業や仕事にオリジナリティを加えよう ～ひと手間加えることの大切さ～	18
日頃のコミュニケーションを大切にしよう ～先輩教員の実践の「行間」を読む～	20
子どもや保護者の声に耳を傾けよう ～教育相談は学級づくりの土台～	22
成果と課題を振り返る時間をもとう ～検証のない実践は危うい～	24
コラム	26

第2章

これからの時代に求められる授業力を身に付けるために

これからの時代に求められる学力を育てる授業を ～時代が変われば学力観も変わる～	28
付けたい力を明確にした授業を ～「初めに教材ありき」から「初めに付けたい力ありき」へ～	30
子どもに目標・学習活動・評価を示す授業を ～問題解決能力を高める～	32
評価を大切にした授業を ～「価値を決める評価」から「支援のための評価」へ～	34
学習の見通しと振り返りを大切にした授業を ～メタ認知能力を育てる～	36
単元を通して学力を育成する授業を ～一時間の授業から単元の授業へ～	38
学習課題を工夫した授業を ～子どもたちの学習意欲が高まる課題づくり～	40
「わからない」を大切にした授業を ～一部の子どもたちだけと授業を進めない～	42
共に学び合う授業を ～教室という空間のすばらしさを実感させる～	44
教師にとっても楽しい授業を ～つまらなそうな表情の教師から楽しい授業は生まれない～	46

活用の手引き



◎二人の会話が出発点です。この二人は、皆さんの進むべき方向性を指し示してくれる人ではなく、皆さんと一緒に悩んだり考えたりする同僚です。

1. 本書の構成

本書は、

「第1章 ライフステージに応じて求められるマネジメント能力を身に付けるために」

「第2章 これからの時代に求められる授業力を身に付けるために」

の2つの章からなっています。

第1章では、教師としてのライフステージに応じて、日頃意識しておきたいことや日々の行動で心がけたいことなどを、10の項目に分けてまとめてあります。マネジメントなどという難しいことのように聞こえるかもしれませんが、本書では、「学校にかかわるすべての人々を生き生きさせ、学校の教育効果を高めていくこと」という意味で使っています。なお、教師としての役割はライフステージによって変わってくるとの考えから、第1章のみ、「若手編」「中堅編」「ベテラン編」に分けてあります。しかし、年代や経験年数で区分したものではありませんので、ご自分に必要と思われる巻を選んでお読みください。編集部としましては、できれば全巻お読みくださることを願っております。

第2章では、これからの時代を生きる子どもたちにどんな力を付けていったらいいのかを考察し、学力や評価のとらえ方、単元や授業の構成の仕方などについて、こちらも10の項目にまとめてあります。日常の授業をどう変えていくべきかについて、なるべく具体的に示すよう心がけました。なお、第2章は、「若手編」「中堅編」「ベテラン編」に共通の内容となっております。

「教師になるより、教師であり続けるほうが難しい」

という言葉があるそうです。子どもたちに「生きる力」を育てることのできる教師であり続けるために、一緒に学んでいきましょう。

2. 本書の活用

本書は「ハンドブック」の形式をとっています。ですから、必要に応じ、どこからお読みいただいても構いません。しかしながら、項目の配列については前後で関連性を持たせるように配慮してありますので、できれば初めから順を追って読まれることをお勧めします。

また、各項目の最後には、「現職教師の声」というコーナーが添えられています。これは、本書の原稿を読んでいただいた先生方にご執筆いただいたものです。この本と学校現場との距離を縮めたいとの思いからご執筆をお願いしました。ここから読み始めるのも、本文の内容を身近に感じるための一つの方法かもしれません。

3. コピーなどについて

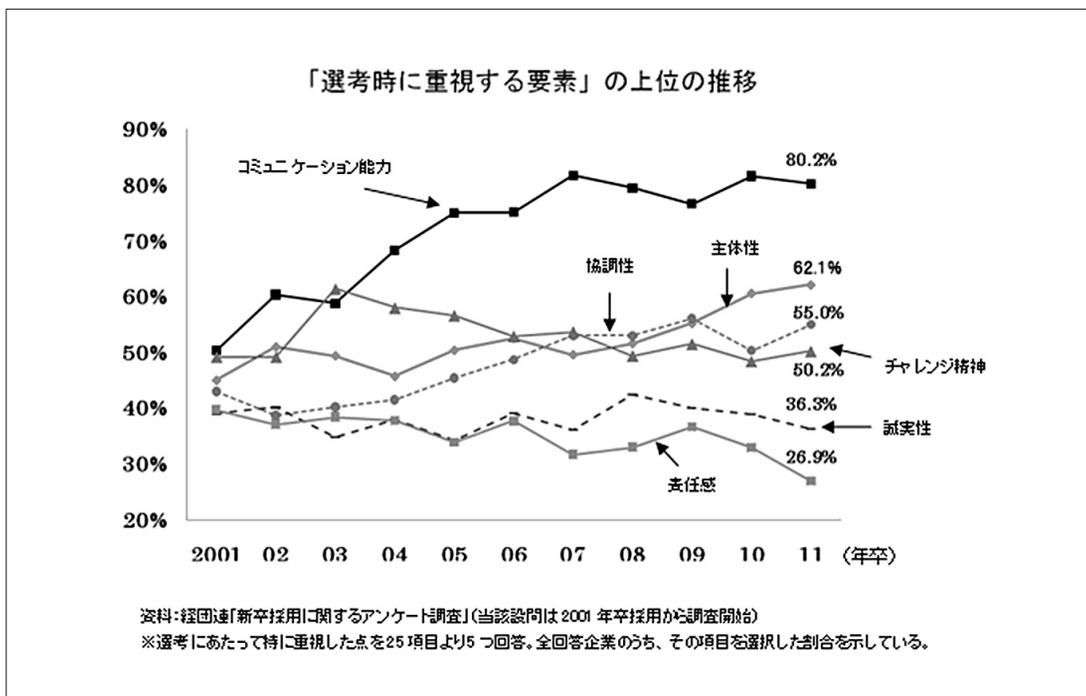
編集部は、この本がなるべく多くの方に活用されることを願っております。したがって、本のページをコピーして職場で話し合ったり、同僚に手渡ししたりすることは構いません。ただし、講演や発表などに用いる場合は、編集部までご一報ください。(連絡先は奥付に記載してあります)

これからの社会に求められる人材とは？

変化の激しい時代を生きていくためには、どのような資質・能力が必要なのでしょう。

それを考えるための一つの指標として、(社)日本経済団体連合会が加盟各社に対して行った「新卒採用(2011年3月卒業者)に関するアンケート調査」の結果をご紹介します。

企業が選考にあたって重視した点を25項目から5つ回答する設問では、「コミュニケーション能力」が8年連続で第1位となり、2位以下の「主体性」「協調性」「チャレンジ精神」「誠実性」の上位5位までの項目も、2010年3月卒採用の場合と同様の順位でした。



新卒採用(2011年3月卒業者)に関するアンケート調査結果の概要(2011年9月28日、(社)日本経済団体連合会)
<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/091.html> より引用

なお、OECD(経済協力開発機構)が知識基盤社会に必要な能力として定義したキー・コンピテンシー(主要能力)の3つのカテゴリーは、以下のようになっています。

- ① 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力(個人と社会との相互関係)
- ② 多様な社会グループにおける人間関係形成能力(自己と他者との相互関係)
- ③ 自律的に行動する能力(個人の自律性と主体性)

経団連の調査と重なる部分が多いと思うのですが、いかがお考えになりますか？

第1章

ライフステージに応じて求められる
マネジメント能力を身に付けるために

第一章

学校を歩いてみよう

～校内は自分を育てる教材の宝庫～

先輩の教室をのぞかせて
もらったんだけど、発見が
いっぱいあったよ。



とうとう憧れていた教師
になれたけど、まずは何か
ら始めた方がいいと思っ?

1. 教師としてのスタートライン

大学でたくさんのことを学び、難しい採用試験を突破して念願の教師になり、期待と不安が入り交じった気持ちで初めて学級に足を踏み入れた人も多いのではないのでしょうか。やっと教師としてのスタートラインに着いたと考えましょう。まずは、じっくりと学級の子どもたちの様子を観察しましょう。学級の中には、多様な子どもたちがいます。落ち着きがない子、授業のペースについて行けない子、物静かな子、活動的な子、外国籍の子どもなど、40人いれば40通りの個性や特徴があるわけです。その学級を集団として育て、わかりやすい教科の指導を進めるためには、学級の子どもすべての個性や特徴に応じた対応が必要です。しかし、教師が一人に対応することは至難の業です。今はあせらず、着実に教師としての力を付けていきましょう。

2. 様々な校内資源

初めて赴任した学校では、右も左もわからず自分がどこに行けばよいのかさえも周りの人たちの助けが必要になります。ちょっと時間があいたら、ぜひ学校内を歩いてみましょう。休み時間に子どもたちに案内してもらうこともいいかもしれません。特別教室や保健室の場所を覚えることは当然のことですが、様々な教材や教具の保管場所なども知ることができます。これからの指導のための貴重な資源です。子どもたち一人一人の興味や理解度に合わせて活用することができる補助教材や情報機器などの場所も押さえておくといいですね。また、生徒指導や学校安全の観点から考えると、校舎の構造上死角となる場所や子どもの動線上にある危険物などを発見することができるメリットがあります。

3. 見る・聞く・まねる

校内を歩いていて見つかるのは、施設や教材などの資源だけではありません。ちょっと他の教室をのぞいてみましょう。先輩の教室からは、たくさんのヒントを得ることができるでしょう。教室の環境整備という視点から見ると、例えばロッカーの使い方や机の配置、掲示物の位置、子どもの作品の展示方法、教室の清掃状況などが参考になるでしょう。指導方針という視点からは、学級目標や係分担の仕方、学級のルールなどを知ることができます。もし、授業中に校内を歩くことができれば、さらにラッキーです。教師の声の大きさや言葉のかけ方などの子どもに対する教師としての姿勢や、板書の仕方やグループ学習の取り入れ方など授業のノウハウについてたくさんのヒントに気づくことができます。もし、歩いていて疑問に感じたことや自分の学級経営や授業に取り入れてみたいことがあったら、周りの先輩たちに相談してみましょう。見ただけでは気づかなかった、先輩教師の深い意図や工夫について知ることができるチャンスです。先輩教師の実践をまねしてみようと、同じ教材を提示して、同じように発問をしても、必ずしも同じような結果や効果が表れることはありません。なぜならその教材や発問は、その学級の子どもに合わせて意図され、工夫されたものだからです。先輩教師に相談をする中で、自分の学級の子どもたちに合わせたカスタマイズを考えましょう。このカスタマイズを自分なりのオリジナルにしていく過程で、教師としての力量がはぐくまれていきます。

このように、校内には子どもに対する教材だけではなく、教師として自分を育てていく教材となる資源がたくさんあります。自分に合う教材を見つけ、教師としての力を高めていきましょう。

●●● 現職教師の声

初任の頃は、先輩の先生方をお手本として見よう見まねで必死に授業をしていた。チームティーチングが基本の特別支援学校では、どの授業にも自分以外に複数の先生がいるので、様々な授業スタイルや指導方法があり、良いところもそうでないところもいろいろ学ぶことができる。学級経営や校務分掌を通じて、教材の工夫をはじめ、教材を生かす言葉かけ、授業者の動き、子どもの観察方法、子どもへのかかわり方などのほか、学校全体を見渡す視点も大切であるということを実験から教わった。先輩の実践をまねる前に、「どうしてこうしたのか」「自分だったらどうするのか」「さらによりよい方法はないか」と自分に問いかけ、自分なりの工夫をすることで、徐々にまねが自身の力や技術へと変わり、教師としての学びが深まるように思う。これからも、目の前にいる子どもたちに必要なことは何かと自分に問い、いつまでもバランス感覚をもち、しなやかに対応できる教師でありたいと思っている。

(20代女性・特別支援学校)

第一章

10年後の自分をイメージしよう

～目標をもつことが向上への第一歩～

どんな教師になりたいのか、具体的にイメージしてみたら…。



子どもたちに慕われる教師に早くなりたいなあ。

1. 教師としてのキャリア形成

授業の準備や事務処理など日々忙しく業務に取り組んでいる教師にとって、立ち止まって自分の将来やこれから目指す方向について考えている時間や余裕はあまりないかもしれません。けれども、将来の方向性に対する見通しが立っていると、目標を立てることや目標に向けて努力することの手助けとなり、将来への不安を払拭することにもなります。自分の目指す教師像を思い浮かべてみましょう。

2. 学び続ける教師

教師は、法律（教育基本法9条、教育公務員特例法21条）において、絶えず研究と修養に努めることが義務づけられています。つまり教師は、自己を高めるために学び続けなくてはならないということです。学び続けることが、なぜ義務と定められているのでしょうか。

子どもたちは、日々成長し続けています。日々成長していく子どもたちの学習ニーズに応えるためには、常に子どもたちにとってちょっと頑張ればできるような課題を用意し続ける必要があります。

また、家庭、地域、社会という子どもたちを取り巻く環境や状況も変化をしており、その中で生きる子どもたちのストレスなどが、不登校やいじめ、暴力行為などの行動として表出している場合があります。さらに、集団での学びにくさや他人とのコミュニケーションのとりにくさを感じている子どももいます。これらの様々な教育環境の変化や教育課題に適切に対応していくためにも、教師は常に学び続ける必要があるのです。過去の経験としての対応だけでは、役に立たないことも現実にはあるのです。

3. キャリアデザインのすすめ

現在必要なことを学び、経験を積み上げていくことは、一步一步着実に力を付けていくために、とても大切なことです。一方、キャリアデザインという視点からは、大きな目標に向けて、それを達成するための計画を立てて取り組んでいくということも、大きく成長するために必要だといわれています。そこで、目標設定のため、10年後の自分をイメージしてみましょう。尊敬する先輩教師の姿を思い浮かべてもいいですし、こんな教師になりたいという姿を思い浮かべてもいいでしょう。

次に、その目標に向けて計画を立てますが、その前に自己分析が必要です。「自分の得意なことは何か」、「自分は何がしたいのか」、「自分の強み、弱みはどこか」など、自分なりに分析をして現在の自分をイメージしておきましょう。同僚や友人からの指摘や自己理解のためのチェックシートやウェブページを活用してもいいでしょう。そして、大きな目標を達成するためのスモールステップを考え、できるだけ具体的に評価できるような行動目標を明らかにしておきましょう。漠然とした計画では、達成したかどうかを明確に評価できないため、結局長続きしないことになります。「～の資格を取る」「～大学の教養講座を受講する」「専門書を～までに読破する」「自主的に校内公開授業を3回行う」など、自分で評価できる計画をスモールステップで立てるのです。研修や研究に対して、義務感ではなく自発的に取り組むことがモチベーションを高めますし、達成感を得ることで、さらに向上心がもてるようになるのではないのでしょうか。

教師の学びに終わりはありません。自己実現のために自己研鑽に励みましょう。

●●● 現職教師の声

特別支援学校に勤務している私は、日頃から多くの教師と一緒に仕事をする機会に恵まれている。仕事を始めたばかりの頃は、先輩教師との関係性を保とうと、周りに合わせていくのが精一杯で、自分がチームの中でどう動けばよいかまで考える余裕はなかった。経験を重ねる中で、チーム内で共通理解を深めたり、同じ指導方針で実践したりするチームティーチングの面白さを知り、この経験を多くの教師と共有したいという目標をもつようになった。だんだんと自分自身がチームの中心という役割を担い、相手の思いを受け止めつつ自分の意見も言わなければならない立場になっていくことを考えると、目標を達成するためには、コミュニケーションスキルを高めていくことが必要であり、当面の課題でもある。

自身のキャリアアップのために、今後は、学年から学部、さらには学校全体へと視野を広げ、自分自身の個性や得意なことを組織の中でどう活かすか、何を学ぶべきか、について段階を追って考え、目標達成のために必要な能力を高めていきたい。

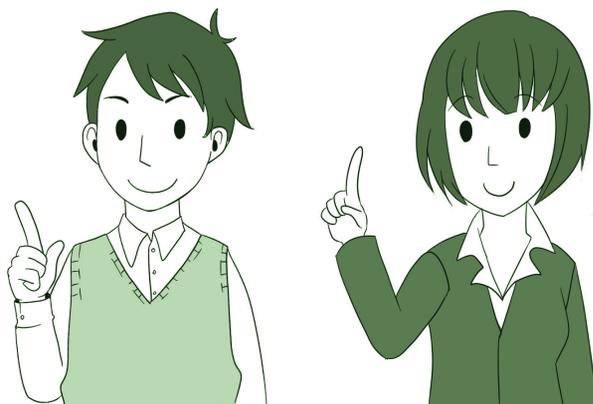
(20代男性・特別支援学校)

第一章

進んで質問したり、相談したりしよう

～先輩職員はそれを待っている～

みんな忙しそうにしているから、遠慮しているのかもしれないね。どうしたら気軽に聞いてくれるようになるかな。



初任の〇〇さん。何か困っているみたい。何でも聞いてくれたらいいのね。

1. 今しか聞けない「初任時代」

「『こんなこと聞いたら笑われるかな』と思ったら聞けないね」

「みなさん忙しそうでなかなか聞くタイミングがないね」

初任者研修の時に、初任者からよく聞かれる言葉です。

「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」ということわざがあります。

初めての教師生活、わからないことだらけです。ですから、聞くことは当たり前のことです。ちょっとリフレーミングしてみると、「聞けるということは、何か困ったことがあるから聞けるんだ。困ったことがないと聞けない」「聞けないということは困っていることがない。むしろ困っていることにも気づかずに、ただ毎日を過ごしているのでは」とも考えられます。さらに、相談しないで勝手にやって、周りを困らせていることがたくさんあるかもしれません。

まずは、わからないことは何でも聞きましょう。先輩たちは待っています。聞くことは、学ぶ姿勢を示すことでもあります。そうすれば同僚の先生たちともきっとうまくいくはずですよ。

2. 先輩が忙しそうにしていたら

とはいえ、先輩たちが忙しいのは事実です。そこで次のように話しかけてはどうでしょうか。

「〇〇についてお伺いしたいのですが、今度お時間を作っていただけますか？」等、まず聞く内容を明らかにして、時間を決めることです。そうすれば先輩たちも安心して喜んで教えてくださることでしょう。

ただ、何でもかんでも聞いて、自分では調べないというのはよくありません。自ら学ぶ努力も大切です。また、「先生にお伺いしたことを試したらうまくいきました。ありがとうございます」等、報告も大切です。先輩たちも喜んでくれるでしょうし、さらに気軽に聞けるようになると思います。

また、聞き方も大切です。「聞く」から「聴く」へ、Hear から Listen へ、「耳と目と心」で受け止めましょう。

3. わからないことをそのままにしない

先生という職業は、初日から大ベテランの先生と同じ仕事をします。ですからわからないことがあっても当たり前なのです。わからないことをそのままにすると、もっと大きな課題が起き、危機へとつながります。

例えば、学年で同じワークシートが配られました。使い方が今ひとつわかりません。「まあ、いいや。書かせるだけだから」

次の日の学年研究会で、各クラスのワークシートを見比べました。あまりの差にびっくり。記述がとても浅いものとなっています。

「事前に〇〇して進めるといいのよ」

「なるほどそうですか！」

ワークシートを仕上げさせるのがゴールではありません。ワークシートを書くことで何をつかませるのかということを大切にしたいものです。

●● 現職教師の声

私は今、初任者として音楽専科をしています。音楽の教材の中には、昔作られた楽曲、共通教材が多くあります。その教材を取り上げた際、子どもたちが理解できない言葉がありました。私は、まずは歌わずに歌詞を掲示し、音読させてから、「この言葉はどういう意味なのかな？」と子どもに問いかけました。子どもたちの反応はあまりなく、その後も学習に対しての意欲があまり見られませんでした。

先輩にこのことを伝え、「どうしたらよかったのか」を聞きました。先輩は次のように答えてくれました。①まずは一度歌ってみる。②『『わからない言葉はあるかなあ？先生は〇〇がわからなかったなあ』のように、子どもたちの興味を引くように進めていけばよいのでは？』

その後の授業では、いろいろな意見が出て、教師の発問や曲との出会いが大切だとわかりました。

この一年でいろいろなことを先輩の先生方から学びました。これからも、わからないことはそのままにせず、何でも聞くことを大切にしたいと思います。

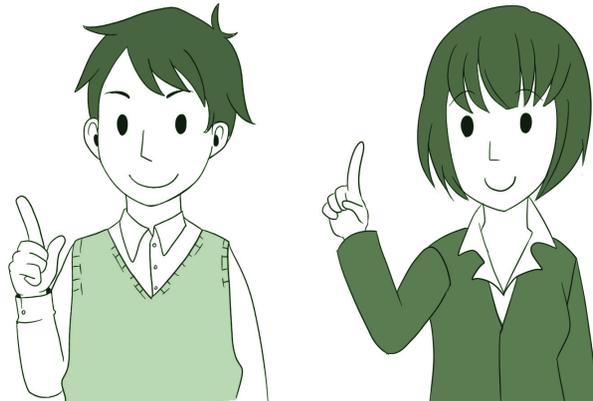
(30代男性・小学校)

第一章

先輩教師に授業を見ていただく

～子どもたちとあなた自身の成長のために～

なるほど！そういう視点
点があったんですね。
気づきませんでした。



あの場面では、「どう
してそう考えたの」と返
してあげると、もっと深
まったと思うわ。

1. 今、授業はうまくできていますか？

自分の授業に点数をつけるとどのくらいでしょうか？

自分で授業をしていると、なかなか振り返られませんが、授業には必ずねらいがあるのですから、それがどの程度実現されたかを、子どもの姿を通して振り返ります。おおむね子どもたちがねらいを実現していればいいのですが、努力を要する子どもが多数いる場合には、次の授業を改善していきます。これが指導と評価の一体化です。ですから、授業が自分の思い通りにやれたかどうかを基準にするのではなく、子どもたちが本時のねらいを実現できたかどうかによって授業の良し悪しを判断すべきです。

また、授業中の自分の姿を振り返ることも大切です。例えば、自分の授業を録画して見直してみると、「早口でしゃべっているなあ」「発問が悪いなあ」「子どもの様子を見ているようで見ていないなあ」「子どもの話を最後まで聞いていないなあ」など恥ずかしくなるくらいです。

2. 課題を解決するために

授業の課題を解決するためには、先輩教員の適切なアドバイスが有効です。

横浜市教育センターでは2005年に、横浜市立学校教諭1,573人に「授業力向上に必要な取り組みは」というテーマでアンケート調査を行っていますが、現場の教師が授業力向上のために効果的な取り組みとして挙げたのは、「授業を見合い、協議する」「授業研究を中心とした共同研究をする」などでした。つまり、授業研究がもっとも効果的であると考えている教師が多いのです。

さらに詳しく経験年数別に見てみると、経験年数の少ない教師は「授業を見合い、協議する」ことが、自らを向上させるのに効果的であると考えています。ちなみにベテラン教師の回答からは、研修を通してさらに新たな情報を求めている様子が見えられます。

また、「授業力向上に役立つのは」の問いに対し、経験年数が少ないほど、「同僚からの評価に期待」が多くなっており、一方、経験を積むと、子どもからの評価を重視します。

すなわち、経験年数の少ない教師ほど、「授業を見合い、協議することを通して授業力を向上させたい」と考えていることがわかります。

3. 先輩教師の適切なアドバイス

先輩教師に授業を見ていただきましょう。

「あの時の発問は大きすぎて、何を話しているのかわからなかったと思うよ」

「子どもがこんな動きをしていたの、見逃していたよ。私だったら、あの動きについて子どもに投げかけて『どうしてあの動きをしたのかな』と聞いてみるわ。きっときらりと光るアイデアを持っているので、そのよさを先生が価値付けしてみるといいわ」

など、自分では気づかない視点で指摘してもらえるとと思います。

そして、アドバイスを聞いた後、自分の授業を見つめ直し、具体的な解決策を考えていきます。その時気をつけることは、手段そのものが目的とならないように、具体的な子どもの姿を思い浮かべて、内容や方法を吟味し、実践していくことです。

たとえば、「発問が大きすぎて…」の場合、一時間で何をねらうのかが曖昧だったことが考えられます。そのため、あれもこれも聞こうということになったのではないのでしょうか？

●●● 現職教師の声

私の学校では、メンターチームという若手教師の勉強会が設けられており、お互いの授業を見合う機会があります。指導案をみんなで検討し、実際の授業を見合います。「ねらいに迫る発問だったか？」「教師が喋りすぎて、何が大切な発問か、ぶれていたのでは？」「子どものどういう姿が見られれば、おおむね達成とするのか？」。これらはすべて私が今までの授業で先輩に言われた言葉です。授業を振り返り、次の授業をよりよいものにするために、先輩教師の具体的なアドバイスは本当に勉強になります。

また経験が少ない私たちにとって、具体的な子どもの姿を予想したり、理解したりすることはとても難しいことです。子どもの「わからない」一つとっても、何がわからなくてそう言っているのか、悩んでしまうこともよくあります。そんな時、先輩に助言をもらうことで、見えてくることも多くあります。よいアドバイスをもらって、生かすきれないこともあります。ですが、先輩が与えてくれる問いの中に、授業をよくするヒントが必ずあると思っています。

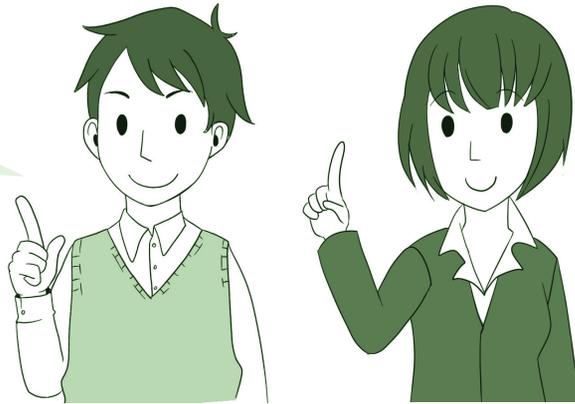
(20代女性・小学校)

第一章

学校づくりに参加しよう

～会議で発言し、自分を高めていく～

学校は、みんなでつくりあげていくもの。互いに理解することや一緒に考え実践していく仲間として、意見を述べることはとても大切では…。



会議で発言してもよいのでしょうか？わからないことが多いので。

1. 皆が黙っていると…

会議で発言するのは勇気がいる、と感じている人も多いことでしょう。

「そんなことも知らないのかと笑われるのではないか」

「会議の進行を妨げてしまうのではないか」

その心配はよくわかります。しかし、誰もがそのように感じて発言しなくなってしまうたら、すべてのことが「皆、わかっていること」「ほかの考え方や方法はないこと」ということになってしまいます。せっかくたくさんの人々が集まって会議をしているのに十分な確認も行われず、対案も出さずというのでは、いかにももったいないことですし、学校全体の発展という点からみても心配な状況です。

若手であるか否かを問わず、誰もが会議に積極的に参加し、質問したり意見を述べたりすることが大切です。

2. 発言の大切さ

十分理解していないにもかかわらず質問をせず、子どもたちに間違っことを伝えたり行かせたりしてしまう。そんなことがあっては大変です。

また、自分はそれ以外の方法が適切だと思ったにもかかわらず意見を言わずにおいたのでは、いざ実行するときにもモチベーションはあがりません。

どちらの場合をとっても、子どもたちに不利益をもたらす結果となってしまいます。

また、一切発言せず、聞いているだけというスタンスで会議に臨みますと、会議に対する集中力が薄れてしまったり、決まったことだけをやろうという後ろ向きの姿勢になったりすることも懸念されます。当然、決定したことに対する責任感も薄れてしまいます。

活気のある学校づくりのためには、すべての教職員が教育活動のあらゆる面で英知を集め、教職員一体となって全力を尽くしていくことが大切です。

3. 参加の態度と心構え

会議で発言する際には、いくつか気をつけるべきことがあります。

会議や研究会の中には、事前に内容が予告されたり資料が配付されたりするものもあります。内容を検討した上で、考えをまとめて参加しましょう。

また、なるべくメモを取りながら聞く習慣をつけることも大切です。その時はわかったつもりになっても、あとで思い出そうとすると曖昧になってしまうということはよくあることです。

意見を求められたり、述べたりするときには、具体的で建設的な発言をするように心がけます。提案の修正を希望するときには、できれば代案を示したいものです。

また、配られた資料の内容によっては、厳重に保管すべきものもあります。個人情報の保護という面からも気をつけたいものです。

こうしたことを実践していくならば、会議もまた、あなた自身を高めてくれる、大切な場となることでしょう。

●● 現職教師の声

初任者として会議に参加していたときは、わからないことばかりで内容は「そういうものなのだ」と受け止めることでしかありませんでした。また、先輩の先生方からの発言などを聞いても「そんな考え方もあるのか」と、どこか“人の決めたこと”だと自分なりに納得していました。

教員2年目となり、様々な仕事をさせていただく機会が増える中、会議で自分が提案者として議題について話す機会も増えてきました。自分の中で練りに練った提案のつもりが、足りないことや抜けていることがあるときに質問などしていただくことによって、はじめて自分自身が気づくことが多いと実感しています。

今後は、他の人が提案した議案についても、しっかり内容を熟読し、「よりよいものにしていく」にはどうしたらよいだろうかなど、常に考えて会議に参加したいと思います。

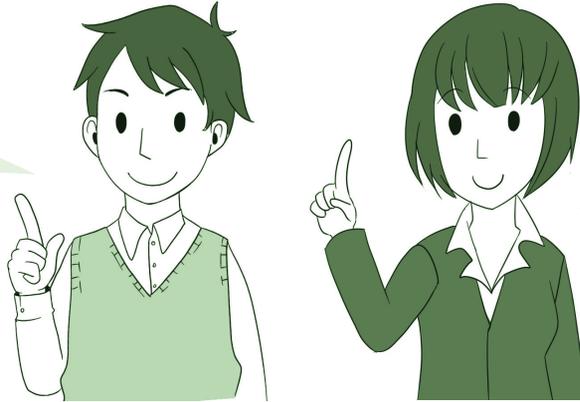
(20代男性・中学校)

第一章

優れた実践をまねてみよう

～「学ぶ」ことは、「まねる」ことでもある～

そうでもないよ。でも、子どもが存在感や達成感・充実感を得られるためにはどうしたらよいのか、いつも考えているよ。



先生の授業は、いつも子どもたち一人一人の、学習への意欲が高いですね。

1. いろいろな人から学ぶ

本を読んだり研修を受けたりすることだけが学ぶことではありません。実践の場においては、「学ぶ」と言うより「まねる」「技を盗む」と言った方が適切な学び方もあります。廊下を歩いたときに垣間見た情景や、朝会や集会での他の教師の話し方などが、授業展開の工夫や学級経営上の課題解決につながるヒントになることもあります。また、ふとした同僚との会話をきっかけに、探し求めていた授業の資料が手に入るということもあります。学びの場は、いたるところに転がっています。

教師自らがいろいろな人からいろいろな場面で学ぼうとする姿勢は、子どもたちにも、よい影響を及ぼすのではないのでしょうか。

2. 学級の壁を超える

教師にとって、学級間の壁は案外厚いものです。ですから、チームティーチングによる授業、交換授業、学年協力によるテーマ別課題解決学習等の形態をできる範囲で取り入れるなどして、授業方法の改善を試みていくことも大切です。子どもについての情報交換などが進み、子どもへの理解が深まると同時に、教師が自己変革を遂げる契機にもなるはずです。

また、学級間の壁の中には、知らず知らずのうちにできてしまった、自分自身の心の壁も含まれています。昔、「学級王国」などという言葉が生まれた背景にも、教師の心の壁の存在が感じられます。そうした壁を意識的に取り払って他の先生方の実践に学ぼうとしたとき、実にたくさんの発見があるはずです。

3. 「まねる」ことの大切さ

子どもたちが課題や目的意識をもち、自分の考えた方法で試行錯誤しながら課題を解決していくことは、とても大切で楽しいことです。そのために、教師は一人一人の実態を把握し、状況に合わせた指導の方法を工夫する必要があります。しかし、そうした授業を作り上げていくことは、とても難しいことでもあります。

あなたの周りには、すばらしい授業をしている先輩や同僚がいると思います。その人は、どのような実践に取り組んでいるのでしょうか。また、その中に、自分にも取り入れられそうな実践はないのでしょうか。発問、板書、ノート指導、学習形態などについて積極的に教えていただき、できる範囲で、まねしてみましょう。

「発問は波紋が広がるようなものを心がけている」

「子どもの発言に対して、思いを受け止めることが大切」

「課題を明確にし、その解決への考え方（思考や判断）の手助けをする」

「学習のねらいや子どもの実態に応じて、一斉学習やグループ学習、個別学習などの使い分けをしている」

授業改善のための、たくさんのヒントに出合えるはずです。

●● 現職教師の声

私の教科では、様々な工具を扱います。その工具一つ一つに適切な使い方があるわけですが、使い方のポイントなど図やことばで丁寧に指導しても伝わらないこともあります。その時は、実際に使っている様子（姿）を見せて、工夫すべき点などに気づかせるようにしています。そうすることで、技能の向上や考え方などが理解できるようにもなります。それでも難しいという子どもがいた場合には、うまくできる友達の「まね」を試みようと呼びかけています。そうすると、子ども同士の学び合いから技能も高まります。また、他の人へ教えることによって、教えた子どもにも自信がもてるようになります。

私も先輩方の授業で、発問場面や考える場面の設定などを「まねる」ことがあります。そこには新たな発見があり、自らの課題に対して解決につながったという経験もありました。つまりきがあったときに、先輩を「まねてみる」ことも大事であると感じています。

(20代男性・中学校)

第一章

授業や仕事にオリジナリティを加えよう

～ひと手間加えることの大切さ～

授業の進め方に自分の流れができたのかな。次は持ち味を加えてみては？



授業がいつもワンパターンになってしまっているような気がするの。



1. 「ひと手間」が仕上げを変える

「教材研究の時間が足りないから、授業は指導書を頼ってしまいます。」

「担当行事や校務分掌では、去年の形式を踏襲して行うことが多いです。その方が間違いも少ないし…。」

こんな話を聞く事があります。確かに、授業を指導書通りに進めたり、仕事を従来通りの形で進めていったりすれば、大きく失敗する事はないかもしれませんが、それだけでは物足りない気がしませんか。

「見上げてごらん 夜の星を」という楽曲を、リレーして歌っていくCMがありました。一人一人の個性ある歌い方が、楽曲の魅力と歌手の魅力を引き出していました。

「授業のねらい」や「仕事の目標」といった押さえどころは確実に押さえた上で、自分はこの指導法で行う、今年はこの計画で実施するなど、「ひと手間」を加えてみませんか。多少音程がずれていても、リズムが外れていても、気持ちのこもった歌声が聴いている人を魅了するように、仕事の仕上がりも魅力あるものになっていくはずですよ。

2. 仕上がりを予想して

授業にしても校務分掌にしても、目標を明確にし、目標達成のためにどう迫るかを構想することは欠かせません。

「この迫り方で目標達成できるだろうか」「この計画でスムーズに進むだろうか」など、仕上がり

の様子を予想すること、そのために、「児童生徒の実態」「職場の現状」などを正確に把握することを大切に、独りよがりにならないことが必要です。

その上で、「こんなふうに変えてみたい」「こんな試みを取り入れたい」というような、あなたの思いを注ぎ込んでいくのです。踏襲だけの仕事より、ずっと楽しく、やりがいのあるものになっていくはずですよ。

3. 子どもたちをみつめ、自分自身を知る

授業や仕事にオリジナリティーを加える…といってもイメージしにくいかもしれません。

まずは自分の得意分野から出発してみましょう。

例えば、IT機器に長けているので授業での使い方を工夫する、合唱指導が得意なので全校朝会に取り入れる、などです。ただし、いくら得意だからといって、どの授業でも同じ指導法だったり、また毎時間IT機器を使っていたりしたら新鮮味は薄れます。合唱が苦手な子どものやる気を喚起しないままに指導しても学びの効果はあがりません。あくまでも目標に迫るために、どのような「ひと手間」を加えるか、という工夫の話です。

「子どもへの指名の方法」「配付するプリント」「グループの活用の仕方」「チーム会議でのアイデアの出し方」等、ひと手間加えられる可能性がある事柄は学校の中にたくさんあります。こう考えると楽しくなってきませんか。

そのために、自分自身に何ができるかを見極めることも必要です。その上でできることの引き出しを増やしていきましょう。「ひと手間」のバリエーションが多ければ多いほど、児童生徒の実態や職場の現状に応じた仕上がり期待できるからです。

●●● 現職教師の声

「指導書の通り」「踏襲して」という部分は、今の自分の行っていることそのものです。今は、枠組み通り、はみださないように進めていくことで精一杯で、オリジナリティーまで考えられないというのが本音です。正直、指導書通りに進めようとしてもうまくいかず、「ねらい」や「付けた力」がぼやけてしまうことも多いのです。

授業導入時に雑談やゲームをとり入れる工夫をしたこともありましたが、まったく興味を示さなかったり、逆に楽しませすぎて授業の本筋に戻すのが大変だったりしました。

それは「自分にできること」を最優先したために、生徒の実態を正確に把握したり、仕上がり予想したりすることが後回しになったからかもしれません。

自分の持ち味を発揮できるよう、成長したいです。

(20代女性・中学校)

第一章

日頃のコミュニケーションを大切にしよう

～先輩教師の実践の「行間」を読む～

今、お時間いいですか？
という声かけができる人
間関係だといね。



みんな忙しそうで、質
問しにくい感じがするの
ですが…

1. 自らも「学びつづける」姿勢を

学校は、同じ年頃の個性あふれる子どもたちが共に過ごし、成長していく場です。学校教育は未来に向かって伸びていく子どもたちを支えていくものです。ですから教師自身も成長していかなければなりません。学校には経験豊富な先輩教師がいます。先輩教師の経験は財産です。「経験から学ぶ」と言いますが、先輩方から多くのことを学びたいものです。

そのためにはコミュニケーションを大切にしなければなりません。コミュニケーションという言葉は「分かち合う」というラテン語に由来しています。先輩教師の豊かな経験や、教育技術を教えていただくことは勿論ですが、失敗談から得たことも分かち合いましょ。

先輩にいろいろなことを聞いてみましょう。「聞きにくいな」と思う事もあるかもしれません。しかし、教師は教えることが大好きです。質問されると嬉しい性質をもっています。「若手」と言われるうちにどんどん質問してみましょう。困ったことがあれば相談してみましょう。

待っているばかりで「誰も教えてくれない」「誰も助けてくれない」と思うよりは、「教えてください」「力をかしてください」と自分から聞く・相談することができる謙虚さをもつことです。

そのことで先輩教師の豊かな経験・財産を共有することができます。

2. 素直に学ぼう

「なぜ、あの先生の授業では子どもたちはいきいきしているのだろう」と羨ましく思うこともあるでしょう。先輩は「豊かな知恵」と「優れた指導技術」をもっています。これは経験から得たものです。

ともすると、すぐに使える「方法」「スキル」を教えて欲しい、と考えがちですが、先輩教師の「思い」を共有することなく方法論に走ることはどうでしょうか。自分の都合で美味しいところをいただくだけでは、成長したことになりません。先輩の「思い」から学び、自分の「願い」と結びつけましょう。先輩の話を素直に聞くことがコミュニケーションの第一歩です。

3. 実践から学び、協働していこう

教師は実践者です。いくら立派な指導案を書けても、多くの論文を読んでも、日頃の授業に生かせなければ何なりません。先輩に経験談を伺ったら、身近な実践の場「授業」を参観させてもらいましょう。その際、自分の授業とどこが違うのか、視点をもって参観することが大切です。疑問に思ったことは授業終了後納得がいくまで質問しましょう。表面を見ているだけでは先輩の「行間」は読み取れません。授業を参観するのが難しい場合は板書を見せてもらい、話を聞くだけでも学びはあるはずです。

また、校内研修の進め方や、子どもへの接し方、保護者対応など、実践例は学校の中にたくさんあります。研究しあい、協働していくことで全体の質の向上が期待出来ます。

「若手」のあなたの率直な質問が、先輩の先生方の気づきや刺激にもなります。あなたの素朴な疑問が学校を変え、子どもたちの成長につながることもあるのです。



●● 現職教師の声

初任者の頃は研修が多く大変でしたが、同期と話すことができました。2年目以降は研修の回数も減り、悩んでいることを話す場が減ってしまい、心細い思いをすることもありました。周りの先生方は子どもたちに接するのも、授業もとても余裕があるように見えるし、学校の分掌もたくさん受けていらして、いつ教材研究しているのか不思議なくらいでした。

放課後、教頭先生と一緒にカーテンの補修をしようと言われ、教室で作業をしている時、私の授業の足りないところや、よいところを話してくださいました。その上で、ご自分の体験談(失敗談)を笑いながら披露してくれました。自分からコミュニケーションをとれない私に配慮してくださったのだな、と気づきました。それ以来、分からないことや困ったことは遠慮なく聞くことにしています。すぐに答えがもらえないこともありますが、お話しすることで安心できます。

(20代女性・小学校)

第一章

子どもや保護者の声に耳を傾けよう

～教育相談は学級づくりの土台～

まず、じっくり話を聴くことが必要なのではないっ



保護者から子どものことで相談を受けたのですが？

1. 子どもや保護者を深く理解していくために

日常の学校生活や家庭での状況・様子をよく理解し、子どもたちのよさや特徴をとらえ、よりよい方向性や成長を願って、期待を込めて見守りながら指導していくことは、学級づくりの土台となります。

学級担任には、子どもたち一人一人の課題を的確に把握し、日々変化し成長し続ける子どもたちを理解し、適切な手立てや支援をしていくことが求められています。そのためには、子どもや保護者の声を積極的に「聴く」ことが重要です。

2. 多くの目で捉える

学級担任として授業をしたり、望ましい学級をつくり上げたりするときには、一人一人の子どもをしっかりと理解して取り組むことが大切です。しかし、子どもの個性や一人一人の家庭環境、保護者の価値観は多様化しているのが現状です。また、学校生活は、各学級を生活の基盤としていますが、クラスの枠を越えた活動の場も多くあります。その結果、担任の目が届く範囲はどうしても限られてしまいがちになります。

一人一人の子どもをできるだけ多くの目で捉えようとするのが、より正しい子ども理解につながっていきます。問題や課題を一人で抱え込むのではなく、同じ学年等を担当している教師間で、様々な経験や知識を基に情報交換や意見交換をすることは、子どもを深く理解する上でとても重要なことです。特に経験の浅い教師にとって、先輩教師の助言は必要不可欠です。

3. 「聴く」ことが信頼関係をつくる

どんな人も、今の気持ちをわかってほしい、悩みを聞いてほしい、自分の考えを受け止めてほしいなどの思いで相談するのではないのでしょうか。それは子どもも保護者も同じです。

相談がきたら、まず相手の気持ちになり、同じ目線、視点で話を聴くことから始めていくことが大切です。こちらが言いたいことや反対意見があっても、あくまでも聴き役に徹して相談内容を肯定的、共感的に受け入れます。保護者との直接面談では、次の方向性を共に考え、よくしていこうとする方向で一致することが重要です。最後は、協力、応援できる体制で終えるような努力をすれば、必ず理解されるはずで、それが、子どもたちや保護者に安心感を与えるのです。

話を十分に聴かず、自分の考えや意見を伝えても「せっかく相談したのに叱られた…」と思われたら解決にはならず、新たな問題の発生になってしまいます。子どもや保護者の話を共感的に「聴く」ことが、信頼関係をつくる第一歩に繋がります。

話を聴いて一緒に考えてくれた、悩んでくれた、相談してよかったという思いが積み重なっていく中で、次第に信頼関係が築かれていくのです。

子どもに対しては、心身の発達の状態や課題を捉えた上で、その子のよさを見つけ、認め、励ますように努め、その行為や取り組みを学級・学年全体に広げ、価値づけるようにしていきたいものです。

保護者に対しては、日頃の苦勞に理解を示し、子どもを共に見ていく、育てていくという姿勢を伝えていくことが大切です。そうすれば、保護者は学級担任にとって最高の応援団になってくれるでしょう。

子どもと保護者にとってよい聴き役になれるように心がけ、学級づくりの土台を築いていきたいものです。

●●● 現職教師の声

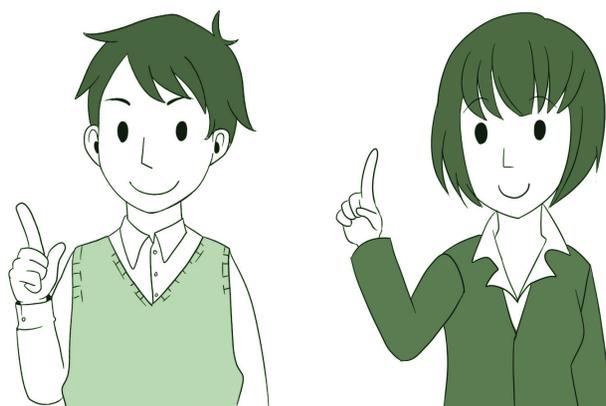
子どもを理解していく上で、保護者との信頼関係を築くことがいかに重要なことであるかをあらためて認識しました。保護者の理解と協力がなければ、どんな教育実践も、子どもたちに浸透していきません。日頃の実践としては、学級だよりを作成し、学校での日常の様子が垣間見られるようにしました。担任からの一方通行のたよりではなく、保護者の声を掲載できるように工夫しました。家庭での子どもの成長や日頃疑問に思うことなどを書いてもらい掲載しています。発行する前には必ず管理職に見ていただき、指導助言を受けます。また、同学年の教師にも渡して気づいたことなどを教えてもらいます。これは、学年で足並みをそろえていくことから重要だと思います。その他、保護者会や授業参観の内容を工夫したり、不参加の保護者に対して内容を伝えたりする努力をしています。保護者と連携を密にとることが、子ども理解につながるがよくわかりました。

(20代女性・小学校)

成果と課題を振り返る時間をもとう

～検証のない実践は危うい～

毎日の実践を振り返り、授業改善をしていく必要があるね。



最近、授業がマンネリ化しているように感じるの。

1. 教師としての力量を高める

同学年の各クラスが、同じ内容の授業や同じ教材を使っても、結果が同じになるとは限らないと言われますが、これはなぜでしょうか。

授業は生き物だから、子どもの実態が違うからなどと様々なことが考えられますが、大きな理由として、教師の対応の仕方によって子どもたちの反応や授業の成果が変わってくるものがあげられます。だからこそ、毎日教材研究をして授業に臨み、それを具体的に振り返ることが重要で、これが、教師としての力量を高める絶好の場となるのです。

この、日々の授業を振り返り、改善を重ねていく姿勢や取り組みが、教師として最も重要な資質や能力を高めていくことにつながります。指導力がある教師は必ずこの積み重ねを行っています。

2. 学び続ける教師

「あの学校は、昨年度すばらしい研究を行ったにもかかわらず、今年度はまったくその成果が生かされていない」という声を聞くことがあります。これは、校内研究そのものが、発表や報告書作成のための研究となってしまうからかもしれません。研究の成果が、子どもたちの学力の向上に反映されなければ、研究とは言えないでしょう。

大切なことは、日々の実践です。形式にとらわれず、子どもたちの実態に応じてあらゆる角度から授業を検証していくことが重要になってきます。その際に先輩や同僚の助言が、授業づくりのための大きな指針になってきます。自分の授業を他の先生に見てもらったり、授業を見せてもらった

りしながら授業力を高めていきます。

授業改善は、教師の生命線です。今後ますます教師の授業力の評価が問われるようになってきます。経験だけに頼って授業をするのではなく、絶えず自らの指導を客観的にとらえ、「我以外皆我師也」のことばのように、常に学び続ける教師でありたいものです。

3. 今日の実践を振り返る

指導力を向上させるには多くの方法が考えられますが、なかでも自分の行った授業や子どもたちの反応などについて、事実に基づいて成果と課題を振り返ることが重要になってきます。

それには、記憶が鮮明なその日のうちに事実に基づいて実践を記録し、まとめておくことが必要です。予定どおりにいかなかったこと、予想外の子どもの反応などを、日誌やノートなどに記入しておきます。また、座席表を用いて、一人一人の子どもの顔を思い出し、今日この子はどうしていたのか、どのような支援をすることができたのか、明日はどう指導していくのかなど、授業実践のノートに記録しておくことも有効です。

さらに、時には教師の働きかけやそのときの子どもの反応をビデオやICレコーダーに記録して、録画、録音で振り返ると、より客観的に分析することができます。また、授業の中でポイントとなるところに絞って分析を行い、同学年の先生と一緒に課題や改善策を考えれば、短い時間で効果的な研修ができます。

このように授業記録をとってそれを検証することは授業改善に役立ちます。子どもへの指導を通して、よりよい教師になろうと努力するこの過程が子どもの信頼を築く大切な一歩です。そうした意味からも、常に成果と課題を振り返る時間を持ち、自己研鑽に努めることは重要なことです。

●●● 現職教師の声

1日を振り返った時に、何をしていたか思い浮かばない子どもがいることがありました。これは本当に申し訳ないことだと思い、その反省を生かして、座席表名簿と授業記録を作成しました。一人一人の顔を思い浮かべながら、明日は「その子にどう接しようか」と活躍の場面を考えたり、「指導のどこに問題があったのか」などを具体的に振り返ったりして、授業改善に生かしています。

同僚や先輩からもアドバイスをいただきました。特に授業に対しての厳しい評価は、自分の授業改善のため、貴重な意見であると有り難く受け止めるようにしています。先輩から「教えることは学ぶこと」と言われました。

最初から授業がうまい人はいないと思います。授業をいかに計画し、実践し、振り返ってきたかでその力量は違ってくると思います。毎日の実践が数年後には大きな差になってくると感じています。

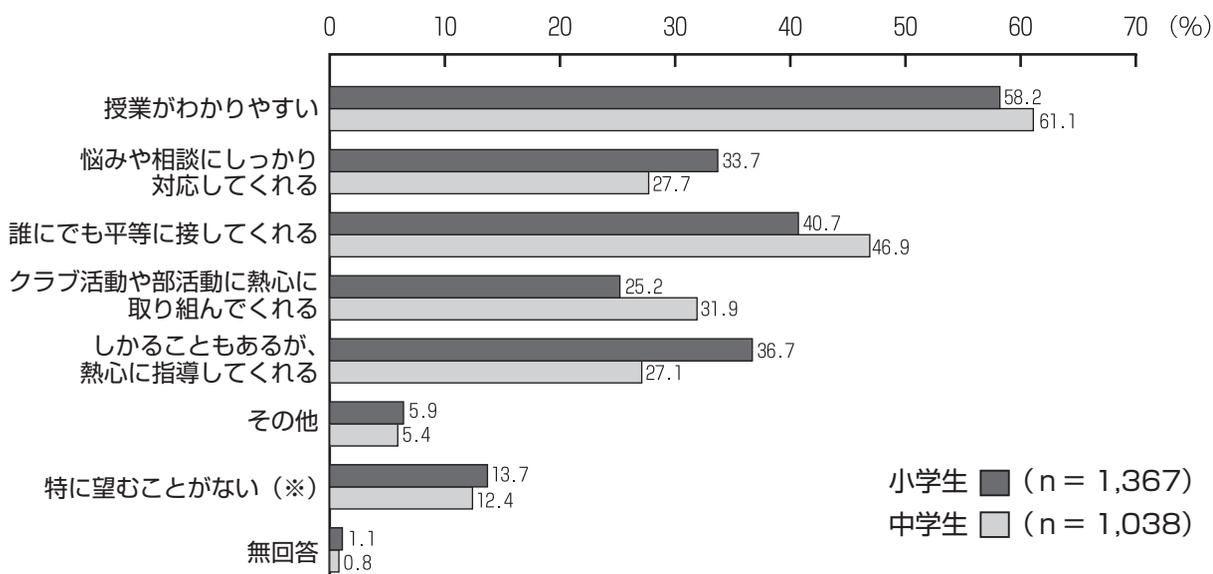
(20代女性・小学校)

子どもたちにとっての「いい先生」とは？

子どもたちにとっての「いい先生」とは、どんな先生なのでしょう。データをもとに、考えてみましょう。

横浜市教育委員会では平成19年10月、児童生徒、保護者、教員、市民の約1万人を対象として、学校教育についての設問を中心としたアンケート調査を行い、その結果を平成20年3月に公表しました。その中から、教員の指導に望むことについての児童生徒へのアンケート結果を引用させていただきます。

教員の指導に望むこと（複数回答）



（※）中学校調査では「特に何も望まない」

横浜市教育意識調査 報告書（平成20年3月、横浜市教育委員会）

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kyoiku/toukei-chosa/pdf/h19hokoku-all.pdf> のデータを用いてグラフを作成

この調査からは、小学生・中学生ともに教師に対し、わかりやすい授業をしてもらえることを望んでいることがわかります。もちろん、それだけで「いい先生」になれるわけではありませんが、まずは授業力を磨いていくことが「いい先生」への第一歩だということは言えるのではないのでしょうか。

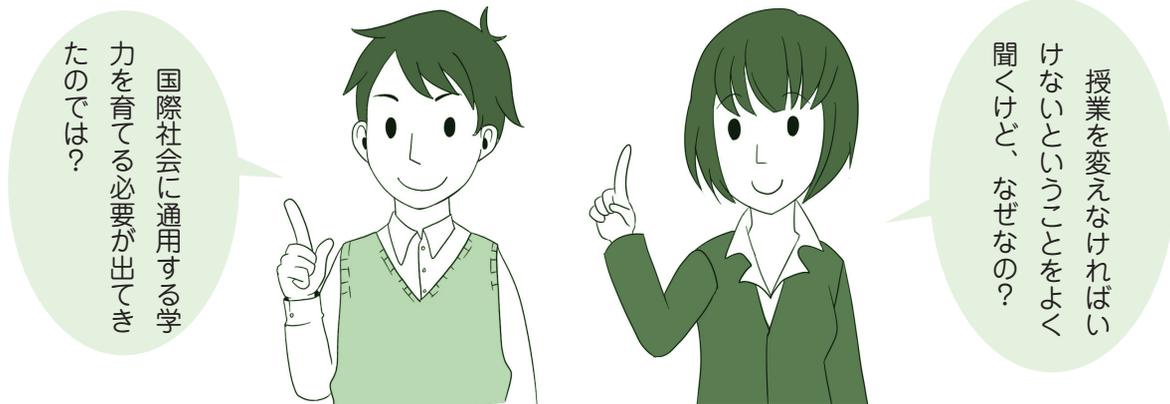
第2章

これからの時代に求められる
授業力を身に付けるために

第二章

これからの時代に求められる学力を育てる授業を

～時代が変われば学力観も変わるへ～



1. グローバル化した現代に求められる学力とは？

どの国にも、歴史や伝統によって育てられてきた、その国に固有の文化があります。したがって、求められる学力も当然その国に固有のものであり、このことは今後も大切にされなければならないと思います。

しかしながら、90年代に入るとグローバル化が急速に進展し、経済も文化も国境を越えて発展する時代となりました。このような時代にあって、いつまでもその国固有の文化や学力だけに固執していたのでは、その国の先行きはきわめて厳しいものとなるでしょう。その国に固有の学力を大切にする一方で、先進国においては特に、国際社会において求められている学力を育成する必要に迫られているのです。

2 国際的な学力調査に見る、日本の学力の特徴

これからの時代に求められる学力を国際的な統一基準によって測定する試みとして、OECD（経済協力開発機構）が開発したのがPISA調査です。この調査などの結果から、日本の子どもたちの学力の課題として、次のようなことが明らかになってきました。学習指導要領解説の「第1章総説1改訂の経緯」より引用します。

- ① 思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題
- ② 読解力で成績分布の分散が拡大しており、その背景には家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題

③ 自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題

こうした現状を受け、平成19年に改正された学校教育法（第30条第2項）（中学校第49条、高等学校第62条で準用）において次のような学力観が示されました。

「〔前略〕生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」

これからは、上記の学力観に立ち、子どもたち一人一人に「生きる力」を育成していくことが求められています。

3. 授業を変える

一斉授業を基盤として発達してきた日本の学校教育は、知識や技能を習得させる面においては優れた伝統を有しており、実際、各種の学力調査においても好成績をあげております。しかしながら、今までの授業においては「先生が教えたことを子どもたちが覚える」という傾向が強かったため、自ら考える力や、考えたことを表現する力が十分には育っていないということがPISA調査の結果からも明らかになっています。また、そのこととも関連するかと思われませんが、学習意欲が諸外国に比べて低いという、残念な結果も出ています。

これからの時代に求められる学力を育成するためには、子どもたちが主体的に学習に取り組み、自分の考えをしっかりと持ち、それを友達と交流するコミュニケーションを通してお互いを高め合うような授業を作っていくことが大切です。教師が主役の授業から、子どもたちが主役の授業への転換が求められているのです。

●●● 現職教師の声

6年理科の『大地のつくり』の課題づくりでのこと。大地に対してもっている自分の考えを見つめ、図や言葉で表現させた。表現されたものを見ると、単なる想像ではなく、これまでに獲得した知識や経験などに裏打ちされた考えであることがわかる。次に、表現されたものを見合い、共通点や相違点を見つけていく。時にはグループで、最終的には全体で見合った。「地面の下には、土が移動する道が縦横無尽に広がっていて、その道を通って、川を流れる水のように、土が動くのではないかと驚くような発想をする子どもがいた。子どものこのような面白い発想があって、授業が豊かになる。どんな考えも受け入れ、自分を含めたみんなの力でクラスの課題へと高めていくことは、子どもたちの自信につながる。だからこそ、この活動には、じっくりと時間をかけ、最終的には、自分たちの力で解決すべき課題を整理していかせた。

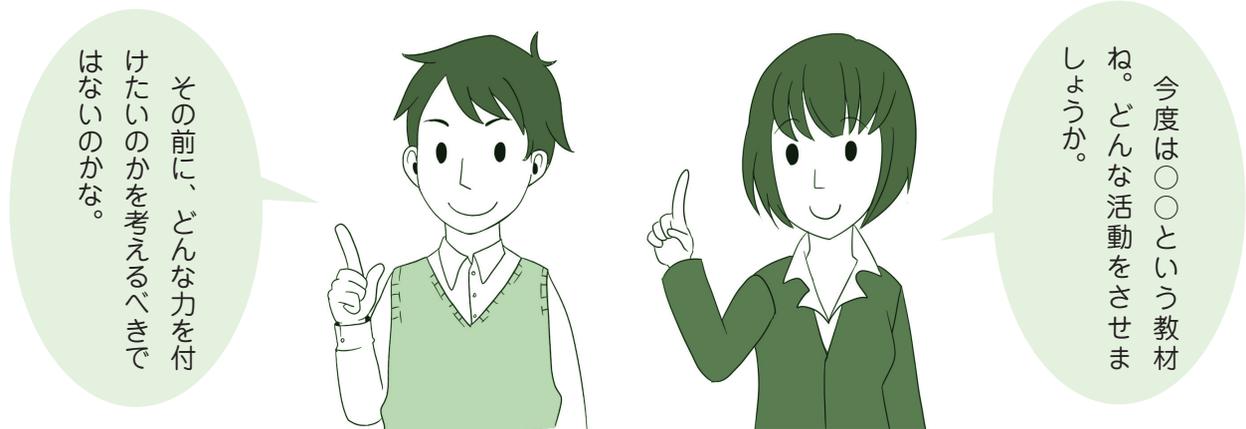
生きる力を育むことは一朝一夕にできることではない。子どものもつ力や可能性を信じて、まずは私たちが、授業を見直し改善していくことだ。将来、国際社会に生きる子どもたちを思い描きながら、日々の実践を粘り強く続けていきたい。

(40代女性・小学校)

第二章

付けたい力を明確にした授業を

～「初めに教材ありき」から「初めに付けたい力ありき」へ～



1. 「付けたい力」が出発点

「次は、この教材だね。どうやって教えようか」

職員室でしばしば聞かれる会話です。しかし、ちょっと待ってください。教材を教えることが大切なのでしょうか。それとも、その教材を通して、学力を育成することが大切なのでしょうか。

もしその教材そのものを教えることが大切なのであるなら、日本中の子どもたちが同じ教材で学ばなければならないはずですが、実際には、教科書の教材は様々です。教材は、学力育成のためのツールの一つに過ぎず、私たちはそのツールを用いて、あるいはそれ以外のツールをも活用して、子どもたちに身に付けさせるべき学力を育成していくのです。

ですから、本来は、

「次に子どもたちに付けたい力はこれこれだね。どんな活動、どんな教材を用いたら、楽しく力の付く授業ができるだろう」

と話し合うべきでしょう。

「教科書を教えるのではない。教科書で教えるのだ」とは、昔からよく言われてきたことです。さらにもう一步を進めて、「教科書を教えるのではない。学力を育成するために、教科書やその他の資料を活用するのだ」と考えるようにしたいものです。

2. 育てる学力を偏らせない

教材→学習活動→評価規準の順で単元を構想していくと、一年間を通してバランスよく学力を育

成していくことが困難になります。

国語科の物語文の指導を例にとって考えてみましょう。どの教材でも、音読は大切です。しかし指導にあたって音読ばかりを大切にしていたら、音読の力は育つかもかもしれませんが、他の指導内容がおろそかになってしまうということも考えられます。まずは一年間で育てるべき学力を明らかにし、その評価規準を明確にしたうえで、それを実現するに適した学習活動や教材を考えていきたいものです。

「学習指導要領の指導事項のうち、〇〇の力を育てていこう。そのためには〇〇のような活動が有効だろう。そして、その活動を行わせるのには〇〇という教材が適しているようだ」

このように発想して年間指導計画を立てることで、学習指導要領に示された指導事項をバランスよく指導することができるようになります。

3. 学習指導案の形式を変える

学習指導案を書く場合、単元の学習指導計画では、「学習活動→評価規準」という枠組みで記述するのが一般的なようです。しかしこれでは、学習活動が決まった後に評価規準を考えることになり、また、付けたい力を意図的・計画的に育てることが困難になります。

思い切って、「評価規準→学習活動」の枠組みで学習指導案を書いてみてはどうでしょうか。その単元で付けたい力が明らかになり、授業が焦点化されるのはもちろんのこと、実はどんな学習活動をさせたらよいのかについても考えやすくなると思うのです。

付けたい力から考えていくことで、授業づくりがやりやすくなったわ。



●●● 現職教師の声

私は音楽専科をやっていますが、今までは、「次はこの題材だから、〇時間でリコーダーをやろう、〇時間で歌おう」という活動にばかり視点を向けてしまい、活動に追われがちでした。けれども、教科書はあくまでも教材であることを認識すると、「次はこの題材からどの曲を使って力を付けよう」「和音の移り変わりを楽しみながら合奏するために、この教材を使おう、この楽器を使用しよう」と視点を定めることができました。そうすると、ねらいがはっきりするため、指導がスムーズになるだけでなく、子どもたちもじっくりと活動できるようになりました。

つい時間と活動に追われて大切なことを見落としがちになりますが、出発点を振り返ることを忘れずに取り組んでいきたいです。

(30代女性・小学校)

第二章

子どもに目標・学習活動・評価を示す授業を

～問題解決能力を高める～

どんな力を育てるために学ぶのか、子どもたちに伝えている？



うちのクラスの子どもたち、言われたことはきちんとするんだけど、自分から進んでやろうとする気持ちが弱いように思うの。

1. これからの授業に求められるもの

これからは、知識・理解の習得だけでなく、それを活用して問題解決する力（思考力・判断力・表現力）を育てると共に、学習意欲を高めることが大切だと言われています。

では、このような授業はどのようにして構想していけばいいのでしょうか。

折り紙で鶴を折るという授業を例に考えてみましょう。

教師が初めの折り方を示します。そして、全員が指示通り折れているのを確かめた後、次の折り方を指示します。このように一つずつ折り方の手順を示し、全員が正しく折れたかどうかを確認しながら授業を進めていくなれば、最後には全員が鶴を折ることができるでしょう。

しかしながら、このような授業において、「子どもたちは自ら考えていたでしょうか」「互いの考えを伝え合っていたでしょうか」そして「学習する喜びを実感していたでしょうか」。

これに対し、折りあがった鶴の形だけを示し、「自分なりに工夫したり、その工夫を伝え合ったりしながら鶴を折ってみよう」という投げかけで授業を進めたらどうでしょう。子どもたちは一生懸命考えることでしょう。いろいろやってみることでしょう。もし、うまい折り方を発見したらうれしくなり、それを友達に伝えることでしょう。そうした教え合いの中で、活発なコミュニケーションも生まれるはずですよ。

できあがった鶴は何度も折り返されたために、美しくはないかもしれませんが。しかし、子どもたちにとっては、とても価値あるものに感じられるのではないのでしょうか。

2. 学習の道筋やゴールを示す

「先生、これ、終わったよ。次は何するの？」

子どもたちの口からこんな言葉が聞かれるとしたら、おそらくこの教室では、教師が次々と学習活動を指示し、それを遂行することが勉強であるといった学習観での授業が行われているのでしょう。しかし、それでは、「授業は先生の指示を実行するもの」となってしまう、自分で学習をプランニングしたり、自分で方法を工夫して学習を進めたりするクリエイティブ（創造的）な学力が育たないのではないのでしょうか。教師は単元や一時間の授業を始めるに当たり、「どんな力を育てるために（目標）、どんな活動に取り組むのか（学習活動）」をあらかじめ子どもたちに示すとともに、なるべく子ども自身の力で学習を進めていけるようにすることが大切だと思います。

3. 評価の観点についても示す

目標や学習活動を示すということは、評価の観点やその規準についても子どもたちに明らかにしていくということになります。先に述べたような授業の例では、「先生の言うとおりにやっていたのに、なぜ△なの？」といった疑問も出かねません。しかし、自分が目指すべき姿が教師から事前にきちんと示されているならば、子どもたちは教師の評価を納得して受け入れるでしょうし、また、自分のよさや今後の努力点についても理解を深めることができるでしょう。

子どもたちにとって、「いつ、どこで、どんな規準で評価されるのか知らされていない」というのは、いわば評価の闇討ちにあうようなものです。これでは、評価によって児童生徒の学習意欲を高めたり、努力することの喜びを実感させたりすることはできません。

閉ざされた評価から開かれた評価への転換を図っていくことも、授業改善のための有効な手立ての一つだと思います。

●● 現職教師の声

「板前にとって大事な能力は、美味しい料理を食べた時に、いかに味を言語化して記憶しておくかである。」と、小説の一節にありました。私たち人間はどのような仕事や場面にあっても、曖昧なまま眠っていたものを言語化しながら創造的な活動をしているのだと思います。子どもたちも同じこと。一人一人の中にある考えや気づきなど、もやもやと見えないものを何とか言葉にして伝え合うことは、子どもたちにとって本来楽しいものだと思います。

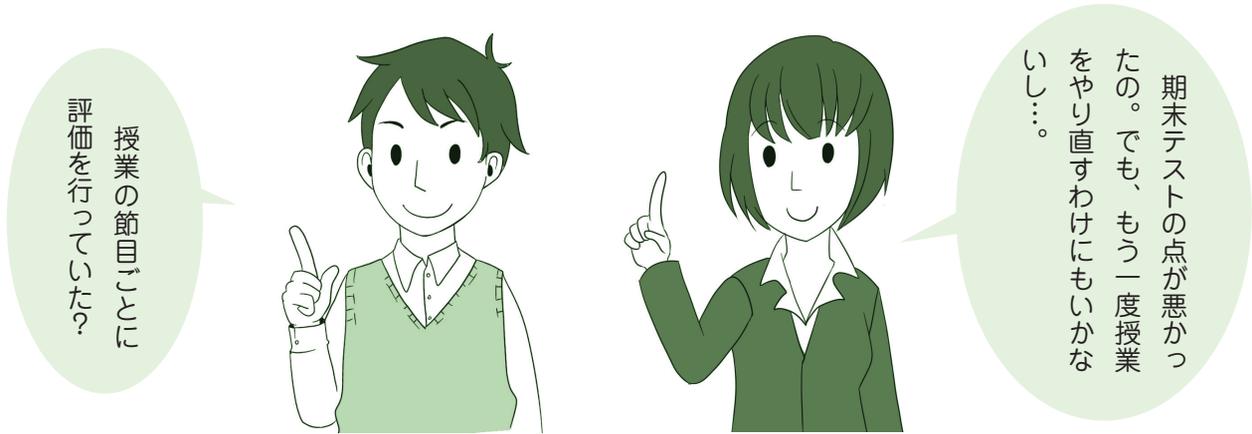
「折り紙、教えてしまえば10分で終わるのに…」、そこをあえて「急がば回れ」で、とことん考えたり話し合ったりする時間を保障することで学びが深まると思います。また、子どもたちは、結果よりも考えたり話し合ったりした過程を評価されることにより、どのような学び手を目指すのかがわかってくるのだと思います。子どもたち自身の力で学習を進めることのできるクラスはそうやって創られるのだと考えています。

(50代女性・小学校)

第二章

評価を大切にした授業を

～「価値を決める評価」から「支援のための評価」へ～



1. 評価という言葉

評価という言葉は、読み下すと「価を評する」、つまり、「価値を論じ、定める」となります。実際に生活の中での使われ方を見ても、「土地の評価額」であるとか「作品の評価が低い」というように、価値を決めるという意味合いで使われることが多いようです。そのため、教育の場においても、評価という言葉からは、テストの採点や通信簿の5段階などをイメージする人が多いかと思います。

しかしながら、教育の世界における評価は少し意味合いが違います。もちろん価値を測るというような意味で使う場合もありますが、本来は「適切な支援を行うために、現状を正しく把握する」ということが評価の役割です。

2. 指導と評価の一体化

単元の学習がすべて終わった後にテストを行うということは日常的に行われることですが、子どもたちの学力育成という面から考えると、あまり効果的な方法ではありません。

例えば、ある子が単元末のテストで50点を取ったとします。この場合、その子は学習の半ばくらいしか理解していなかったと考えられるわけですが、にもかかわらず、授業が次の単元に進んでいるというのであれば、その子にとって残り50点分の学力の回復は望めないこととなります。

まずは、学習のプロセスにおいて適切に評価し、必要に応じて指導を行うことが大切です。そうした評価と指導を一体的に、しかも不断に行いつつ、単元の終末においてはすべての子どもたちに、評価規準が実現するように努めていくのです。これが、「指導と評価の一体化」ということです。

また、評価にはもう一つの大切な役割があります。それは、評価結果を基に授業を改善していくということです。子どもたちの学習状況をとらえ、授業の組み立て方を変えたり発問や資料を工夫したりしていく。これが、わかる授業づくりには大切です。この点から考えてみても、単元末のテストだけで評価を行うということが不適切であることは明らかでしょう。

3. 質的評価を大切にす

評価を学習支援に役立て行くためには、教師の評価観を、量的な評価の重視から質的な評価の重視へとシフトすることも大切です。

量的評価観の代表はテストの得点でしょう。しかしながら、テストで測れるのは、学力のほんの一部です。国語科を例にとった場合でも、3つの領域のうち、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学力については、テストで測ることは困難でしょう。「読むこと」についても、テストで測れるのは一部に過ぎないと言われてい

ました。したがって教師は、子どもたちの話した言葉、書いた文章、学習中の態度等、あらゆるものを評価の材料にして評価活動を行うことが求められます。しかし、子どもたちのあらゆる面を常に評価するというのは現実的な話ではありません。そこで、観点ごとに単元の評価規準を立て、評価方法を明らかにして、そこを中心に評価を行っていくのです。

このように評価規準を明確かつ焦点化して設定し、その実現を図っていくことが、子どもたちに確かな学力を育成していくことにつながります。

●●● 現職教師の声

以前は、評価とは「教えてきた知識や技能が子どもたちにどのくらい身に付いているのかを最後にテストするもの」と考えていました。ですから、各単元の終わりに実技テストやペーパーテストを行い、その結果を「できた」「できない」で簡単に片づけてしまい、評価しっぱなしの状態でした。いわゆる評定をつけるためだけの評価でしかなかったのです。そんな評価を続けていても当然、子どもたちに力は付きません。そこで、単元目標に対して各小単元での評価規準を考え、それを実現させるにはどんな学習活動が必要なのか考えました。単元の途中で観点別評価をすることにより、その結果によってどんな学習支援をしていけばよいのかも見えてくるようになりました。そうした支援をすることによって、子どもたちも単元の途中で何をがんばればよいのが明確となり、結果的に「やる気」にもつながっていきました。このことから、評定をつけるためだけの評価ではなく、子どもたちを育てるために評価をするという認識でいかなければいけないと思いました。

(40代女性・中学校)

第二章

学習の見通しと振り返りを大切にした授業を

～メタ認知能力を育てる～

毎時間の終わりに、なるべく書かせるようにしているのだけれど、同じようなことばかり書くんだよね。



最近、学習の振り返りが大切だということがよく言われますね。

1. 同じような振り返りの多いわけ

学習指導要領の総則「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の中に次のようなことが書かれています。

「各教科等の指導に当たっては、児童（生徒）が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること。」

これを受けて、教室では今まで以上に振り返りの活動が重視されるようになってきました。しかしながら子どもたちの書いたものを見てみると、「今日の授業は楽しかった」「発言ができてよかった」など、決まりきった言葉が多いようです。こうした言葉からは、今日の授業で何を学んだのか、また疑問点として残ったのはどんなことなのか伝わってきません。したがって、子どもたちの学力育成という面では、あまり役に立たないものとなってしまいますし、教師の授業改善にとっても有益な情報とはなりにくいでしょう。

振り返りに書かれている内容に授業の印象や自分の行動を中心とした言葉が多くなる背景としては、子どもたちに評価の観点を示していないことが考えられます。学年が進んでも、振り返りに書かれている言葉がいつも同じようだという場合には、子どもたちに振り返りの観点を明確に示しているか、教師自身が振り返ってみることが必要なようです。

2. 見通しを立てたことについて振り返る

振り返りで大切なことは、「自分が立てた見通しがどの程度実現できたのか」を振り返ることです。

「見通し」と「振り返り」はセットなのです。

「ここでの学習のめあてはこれで、その実現のためにこんな学習をする」という見通しを一人一人が自覚して学習に取り組んでこそ、学習の最後に「めあてはどこまで実現できたのか。学習方法や取り組み方は適切だったのか」を振り返ることが可能になります。

また、こうした学習を繰り返すことで、子どもたちにメタ認知能力が育つことが期待できます。メタ認知能力とは、「認知している自分を認知する能力」、つまり、自分の学習を対象化し、外側の目で見直す能力であると言ってもいいでしょう。

これからの時代の学び手に求められているのは、「言われたことだけを行う」受け身な姿勢ではなく、「自ら学びを創り上げていく」主体的な姿勢です。そう考えるとき、メタ認知能力の育成がいかにかに大切であるか、ご理解いただけるでしょう。

3. 振り返りを指導に生かす

教師は、単元の中で「付けたい力」を明確にするとともに、子どもたちにはその実現へのゴールをめあてという形で示します。そして、そこに至る道筋も示します（教科の内容によっては、めあてや道筋を子どもたちに考えさせることもあり得ます）。一時間単位で示す場合もあるでしょうし、数時間単位で示すこともあるでしょう。したがって、振り返りについても一時間単位で行うこともあれば、数時間単位で行うこともあります。学習の見通しのもとに行われた児童生徒の振り返りは、特定の子どもへの指導を充実させたり、授業のあり方を改善したりする、とても重要な材料となります。

また、振り返りを行わせて各自の課題がはっきりしたら、それを宿題に課すことにより、補充学習の充実を図ることもできます。

振り返りは一般的には授業の最後に行わせますが、それを授業の最初に行わせることで、各自のめあての再確認に生かしていくという方法もあります。

●● 現職教師の声

社会科の学習で、「友達の意見をよく聞いて、その意見につなげて発言できるようにしよう」と指導したことがあった。話し合い自体は、直前の意見につけ足したり反対したりして、活発に行われた。話し合いの前と後で自分の立場が変わる子どもがいて、それなりに考えが深まっているものと評価した。ところが、その日の振り返りカードを見ると、「話し合いで自分と同じ意見の人が多くてうれしかった」「自分が言いたいことを代わりに言ってくれる人がいて楽しかった」「思い切って発言したら賛成してくれる人がいて勇気をもてた」など、その日の学習のねらいとは離れた内容のものがあき愕然とした。

教師側は、学習のはじめにその日のめあてを子どもにはっきりと示し、評価のポイントを伝えることが不可欠であることを痛感し、現在は、板書の中の言葉をキーワードとして指定して振り返りの中に入れるよう指示するなど、評価計画に従ってポイントをしばって振り返らせるようにしている。

(30代女性・小学校)

第二章

単元を通して学力を育成する授業を

～一時間の授業から単元の授業へ～

それに、導入に時間をかけ過ぎて、時間が足りなくなるってよくあるよね。



毎時間の導入を考えるのって、結構大変よね。

1. 導入・展開・まとめは授業の常識？

「導入の時は盛り上がっていたのだけれど、いざ本題というときには集中力が続かなくなってしまった」とか、「導入に時間をとられてしまい、授業が尻切れトンボになってしまった」という経験をお持ちの方は少なくないのではないかと思います。これでは本末転倒です。そもそも、導入は必ず必要なものなのでしょうか。

長い間、一時間の授業は「導入・展開・まとめ」という展開で構成されるということが、日本の学校教育の、いわば「常識」でした。この「常識」の前提としては、一時間のまとまりで授業を完結させていくという、枠組み優先の考え方があるように思います。しかしながらモジュールに象徴されるように、今は「枠組み」より「子どもたちの実態」や「育成すべき学力」を中心にして考える時代となってきています。

集中力の持続しにくい小学校1年生であるならば、30分の授業を組むことも可能です。それでも、「導入・展開・まとめ」がいるのでしょうか。中学生ともなれば、各自が何時間にもわたって課題追究をすることも可能でしょう。それでも50分ごとに区切って、「導入・展開・まとめ」としなければいけないのでしょうか。初めに枠組みありきではなく、子どもたちの実態や育てたい学力の面から授業を捉え直してみる必要がありそうです。

2. 学力は単元で育てる

「育成すべき学力」を育てるために、単元が構想されます。だとすれば、単元全体の学習を通して

学力が育っていけばいいわけです。よく、一時間の授業だけを見て、「この時間でどんな学力が育ったのか」などという指摘をする方がいらっしゃいますが、正しくは「この単元を通してどんな学力が育ったのか」を問うべきでしょう。

一時間単位の学習にこだわっていると、学習内容を一時間単位で分割して教えるようなことにもなりかねません。その結果として、「この時間は内容が少ないのでゆとりがあるが、次の時間は内容が多いので詰め込みになってしまう」などということさえ起こりかねません。また、個々の学習進度に応じた授業構想なども困難になってしまいます。

3. 評価規準に基づく評価のない時間もあり得る

単元の評価規準を実現するために授業は構想されます。ですから、評価規準は単元全体を通して実現されればよいわけです。したがって、評価規準に基づく評価がない時間というものもあり得ます。例えば、国語科の授業において物語文を読む学習を考えてみましょう。評価規準には、読み取りの能力に関するものが立てられていたとします。その一時間目、子どもたちは、教材文の範読を聞いた後、自分の読みを確かにするために何度か繰り返して黙読していたとします。この場合、子どもたちはまだ自分たちの読み取ったことを表現するまでには至っていないわけですから、読み取りについての評価規準は適応できないことになります。

ただ、ここで間違っはいけないことは、評価規準に基づく評価はないが、日常的な意味での指導と評価はあるということです。学習姿勢に関するもの、黙読の方法に関するものなど様々な面で教師は子どもたちの学習を評価し、適切な指導を行っていきます。

「単元を通して学力を育成する」ということが一時間の授業をおろそかにしてもよいということではないことは、言うまでもありません。

●● 現職教師の声

国語の授業で狂言を取り上げるに当たり、単元を通して「昔の人のものの見方や感じ方について考えよう」を目標に学習を進めることにしました。はじめは狂言の独特な話し方や動作のおもしろさから「狂言って楽しいね」としか思わなかった子どもたちも、解説文に触れることで、狂言が一体どんなことを人々に伝えたいのか、どんなことをテーマにしているのかなどを考えるようになってきました。そのことを確かめるために複数の狂言作品を読んだところ、狂言の内容がもつ共通点を見出したり、伝統文化として受け継がれている意味を考えたりするようになり、単元のまとめでは、「今生きている自分たちも狂言のお話に共感できるしおもしろいと感じるのだから、きっと昔の人たちも今の自分たちと同じように、みんなが共感しておもしろいと感じたのだろう」という考えにたどり着くことができました。

これが今年一年、単元として授業を考えて一番手応えのあったことでした。

(20代女性・小学校)

第二章

学習課題を工夫した授業を

～子どもたちの学習意欲が高まる課題づくり～

子どもたちの実態と意識に合っていないなかったんじゃないかな。ちょっと工夫してみようよ。



学習課題を明確に指示したのに、子どもたちがなかなかのってこないの。なぜかしら？

1. 授業づくりはドラマづくり

授業づくりは、テレビや映画のドラマづくりに例えられることがあります。授業にもドラマと同じように、「オープニング（学習課題の提示）からクライマックス（学習活動）そしてエンディング（学習成果の評価）」に至るシナリオ（授業構成）が必要であるということの例えです。

もちろん、授業づくりのシナリオのエンディングに求められるのは、「その授業で育てたい能力などが確実に身に付くこと」です。

では、オープニングに求められることは何でしょうか。それは、「子どもたちが学習に興味・関心を持ち、学習活動に引き込まれていくこと」と言えるのではないのでしょうか。

2. オープニングで大切なこと

オープニングはたいていの場合、課題提示から始まります。この課題の良し悪しが、子どもたちの学習意欲に大きくかかわってきます。

では、学習意欲を高めるような課題とはどんなものでしょう。

一つは「やってみたい、考えてみたいと思えるような、面白い課題」であることです。

例えば、子どもたちの興味・関心を高め、面白いや楽しいを実感させるために、子どもたちの身近な出来事や毎日の生活に根ざしたところから課題を作ったり、世界のニュースやトピック的な話題と関連づけた課題を工夫したり、他の教科やこれまでの授業等に関連づけた課題を提示したりすることなどが考えられます。

そしてもう一つは「(自分にとって) 価値がある課題であること」です。

自分にとって学習する価値があるということを実感させるためには、その後の生活に役立つような実用性を考慮して課題を設定したり、人のためや社会貢献につながるような課題を工夫したりすることなども有効です。

学習課題に興味・関心が湧き、必然性を納得すれば、子どもは自ら学習に取り組んでいくことでしょう。

3. エンディングと結びつくこと

ただ、オープニングの工夫ばかりに気を取られ、それが、その後のクライマックスやエンディングの充実に結びつかないとしたら、何の意味もありません。オープニングの工夫は、あくまでも学力形成のためにこそ大切なのです。

先に、エンディングに求められるのは、「その授業で育てたい能力などが確実に身に付くこと」であると書きました。どんなにオープニングで興味・関心を掻き立てたとしても、それを追究することで子どもたちの学びが深まっていかなければ、結果として、いわゆる「活動あって学びなし」の授業となってしまいます。

教師には、子どもたちとのさまざまなやりとりの具体的な場面を想定しながらシナリオを計画的に考え、オープニングから確実にこのエンディングにたどり着くためのシナリオづくり、すなわち全体構成を考える能力（授業構想力）が求められるわけです。

子どもたちと共にいいドラマをつくりたいものですね。

●● 現職教師の声

新しい単元に入る時に、その単元の学習目標と評価の方法、展開等を伝え、学習の見通しをもたせます。さらに、私は生徒と一緒に考えながら、単元名のオリジナル化を行います。学習の課題意識が高まるからです。例えば、平家物語の学習では、「声とことばで源平合戦を再現しよう」ともちかけ、グループごとに音読を工夫させましたが、その時のネーミングは、「武士の戦いと美学」というものでした。

また、学習状況が高まっていく過程を生徒が自分で確認できるようにしたいので、一時間の授業ごとに学習目標を提示し、最後に振り返りをさせています。この授業の場合、対抗戦のような形で音読の工夫を競わせましたので、振り返りは「戦評定」と名付けました。生徒は、毎時間、勝つための工夫を書きためてきているので、単元の最後では、学びの実感のある振り返りを行うことができました。

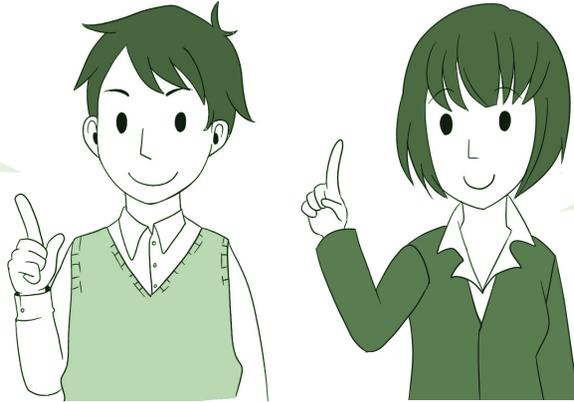
(50代男性・中学校)

第二章

「わからない」を大切にした授業を

～一部の子どもたちだけと授業を進めない～

それだとわからない子は参加しにくいね。そもそもわからないから授業をするんだから、「わからない」を大切にしたい見直しが必要だよ。



授業で「これわかる人いる？」って聞くと元気よく手を挙げてくれる子がいて、授業がすごくスムーズに進むの。でも、これでいいのかなあ？

1. まず授業を進める前提は？

算数の時間、「この問題、わかった人は？」と先生が問題を出すと、何人かの子どもが手を挙げました。そこで先生は、「では、〇〇さん、黒板にでてやってごらん」と、一人の子どもを指名して、授業を進めていきました。

教室では当たり前のようにみられる光景です。しかし、このやりとりの中にはいろいろ考えなくてはならないことが含まれているように思います。

まず、教師が授業を進めるために相手にしているのは「わかっている子」です。しかし、子どもはわからないから学習するわけで、わからないことをわかるようにするのが授業です。とすれば、授業を進める前提は「わかる人」ではなく「わからない人」であるべきでしょう。

また、子どもたちの中にはいろいろなタイプがあり、自分の考えをまとめるためにはじっくりと考える時間を必要とする子もいます。にもかかわらず、すぐにわかる子を指名してしまったら、その子はどう思うでしょう。「僕にはわからなかった。〇〇さんはすごいな」

2. 「わかる」とは？

教師は割合に軽く「わかる」という言葉を使いますが、子どもの実態や状況を見ると、「わかる」にもいくつかの段階があることがわかります。

第一段階は、「今まで知らなかったことを知る」あるいは、「わからないと思っていたことがわかるようになる」という状態です。基礎的・基本的な知識や技能を習得した段階と言ってもいいでしょ

う。

第二段階はもう少し深化して、「知識としてわかるだけでなく、自分で使えるようになる」という状態です。基礎的な知識・技能が活用できるようになった段階とも言えます。

もう一段上の第三段階は「わかったことについて活用できるだけでなく、他者に対して自分の言葉で説明できる」という状態です。探求、創造につながる段階とも言えます。

ここで先ほどの授業の例を振り返ってみましょう。先生が問いを發し、子どもたちがそれに答えるという授業では、第一段階の「わかる」は実現するかもしれませんが、第二段階、第三段階の「わかる」までは深められないのではないのでしょうか。

3. どうすればいい？

そう考えていくと、授業を見直すポイントが見えてくるように思います。

まず、一人一人の子どもに十分に考える時間を与え、「わかったことは何か、まだわかっていないことは何か」をはっきりとさせます。そして、「まだわかっていないこと」を全員の前で発表してもらいます。この際大切なことは、子どもたちの「わからない」が大切にされるクラスを作っておくということです。「恥ずかしくて、わからないなんて言えない」とか、「わからないと言ったら笑われてしまいそう」などと子どもが思うようなクラスであれば、心の中では強く「わかりたい」と思っている子であっても、「ここがわかりません」などとは決して言わないでしょう。

さて、友達の「わからない」が明らかになったら、それを「わかる」に変えていくために、言語活動の充実を図りながら、クラス皆で学び合うようにさせることが大切です。一緒に話し合う、他の場面に置き換えて考えてみる、わかった子がわからない子に説明するなど、いろいろな学び方が考えられます。「わかる」授業をするために、「わからない」を大切に、「わかる」段階を深化させていく。そういう授業展開を工夫したいものです。

●●● 現職教師の声

今までは「わかる」という児童の実態の三段階について、意識して考えていませんでした。児童は、教師の思い描いている答えに近づこうとして発言する場合があります。その答えで教師が満足して次へ進んでしまうことは恐ろしいことだと思いました。

単元全体を通して、どのような力を身に付けさせるのかをしっかりと意識して授業を展開していけば、「わかる」の段階をどこまで深化させるべきかが見えてくると思いました。

児童の「わかりたい」という学習意欲を大切に、一人一人に本時の課題を自覚させ、課題と向き合う時間を保障した後で、課題解決のために協力、協調し切磋琢磨し合うという授業展開をしていけば、理解の深まりも得られると思いますし、よりよい人間関係も醸成できると思います。児童が伸びやかに自分の疑問や考えを発言できる学級風土の確立は、何にも増して大切なことであり確かな学びに繋がるということを再認識し、日々の教育活動を行っていきたいと思います。

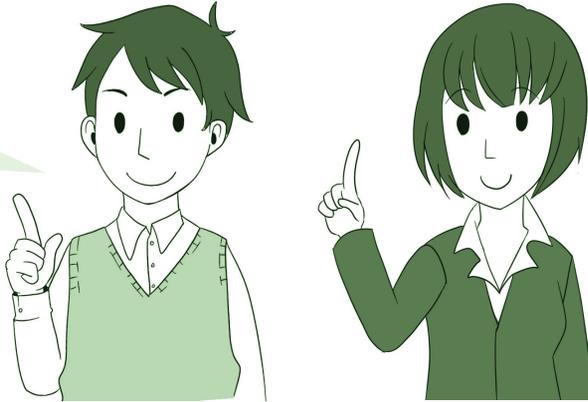
(50代女性・小学校)

第二章

共に学び合う授業を

～教室という空間のすばらしさを実感させる～

子どもたちの頭の中はど
うだったのかな。静かに聞
かせるだけで満足しないで、
授業の中で子どもたちが自
分の考えを説明し合うよう
な活動も大切にしたいね。



今日の授業はとってもう
まく説明できたの。子ども
たちもとっても静かに聞いて
いたけど、活気がないの。
これでいいのかしら？

1. 講義型の一方的な授業から脱却しよう

教師にとって、「うまく説明できる」話術は必要な授業力の一つです。しかし、いつも聞いているだけの授業では、子どもの学習意欲は減退してしまうし、思考も停滞しがちになってしまうことでしょう。これからの時代を生きる子どもたちに必要なのは、「学ぶ意欲」と「考える力」だと言われています。そうした力を育てていくには、教師が一方的に知識を教え込むだけの授業では、あまり効果があがりません。子どもたちがどうしたら意欲的に学ぶか、どうしたら考える力を育てていくことができるか、そんな観点から日頃の授業を見直してみましょう。

2. 共に学び合う授業をつくる

子どもの学びの形態には、教師から教わる学びのほかに、子ども自らが学ぶ学びや、友達と一緒に学び合うような学びがあります。授業の中に、教師が知識や情報を伝えるだけでなく、子ども自らが学ぶ場面や共に学び合う場面をバランスよく取り入れていくことが大切です。

中でも、これからの時代の教育では、「共に学び合う授業」を大切にしていってほしいと言われていきます。なぜでしょう。

「共に学び合う授業」を心がけることで、さまざまな効果が期待できます。

第一の効果として考えられることは、教師の話聞くという受け身の学習姿勢から自らも発言するという能動的な学習姿勢に変わること、子どもの学びが主体的になるということです。

第二の効果として期待できるのは、言語活動の充実が図れることです。友達と話し合ったり教え

合ったりする学習活動を繰り返す中で、知識を活用する力が育っていくということです。よく言われることですが、友達に教えるということは、教えられた子どもの理解が深まるだけでなく、教えた子どもの理解も深まります。こうした学び合いによって、これからの時代を生きていく子どもに求められる「思考力・判断力・表現力等」が育っていくことが期待できます。

第三の効果として、共に学び合うことにより他者の考え方や見方を知り、他者の考える過程に気づくということがあげられるでしょう。他者の思考を自分の考え方と比較することで、メタ認知する力が育ちます。また、他者の思考をヒントにして、自分の思考を再構築することもできます。さらには、競争心なども働いて、学習のモチベーションを高め合うことも期待できるでしょう。

それだけではありません。共に学び合うことは、質の高い学びの集団づくり、そして共に学び合い高め合う友を得ることにもつながっていきます。共に学び合う授業が行われている時間は、まさに教室という空間のすばらしさを実感させてくれる、貴重な時間といえるでしょう。

3. 共に学び合う授業を効果的にする条件

共に学び合う授業を効果的にするにはいくつかの条件があります。

その一つが、学びの規範づくりです。具体的に言えば、人の意見をあたたかく聴く、人にやさしく話すなどの授業規律を確立することです。これが質の高い学びの集団づくりの核になります。

また、各学級、各教科の授業でそれぞれ教師がバラバラに学び合い学習を進めても効果的なものとはなりません。学校として、組織的かつ総合的な取り組みをすることが求められます。

しかし、最も大切なのは、学び合いの指導者、すなわち教師自身が学び合いの意義や効果を理解し、実感することです。そのためには、学校という職場において、教師自らが学び合う存在でなければなりません。他の先生方と共に学び合うという姿勢を、常に忘れたくないものです。

●●● 現職教師の声

授業中に、「これだから教師はやめられない」と思うような、わくわくする経験をすることがあります。例えば、その子らしさやその子のよさが十分発揮されたとき、子どもが教師の予想を超える活動をしたときなどです。「その発想はじつに君らしい。しかもユニークだ。」「私も気がつかなかったよ。どうして、そう考えるようになったの？」そんな言葉を、思わずかけてしまいます。

言語活動の活性化された、共に学び合う授業では、その子らしい気づきや、より練られた考えが生まれてきます。また、お互いを認め合うことが増えるので、子どもの自己肯定感が高まり、他者受容も促進されます。「学び愛」という言葉があるそうですが、まさに実感されます。

(50代男性・中学校)

第二章

教師にとっても楽しい授業を

～つまらなそうな表情の教師から楽しい授業は生まれない～

そうだね。子どもたちの
気持ちを活性化するために
も、授業中の自分の表情を
振り返ることは大事だね。



授業の時、子どもたち
は私の表情をどんなふう
に見ているのかしら？
とても気になるわ。



1. どんな表情で授業していますか？

楽しさや意欲、やる気は伝染するものです。当たり前のことだと思うのですが、つまらなそうに授業をする教師の顔を一時間、さらには一年間も見続けるとしたら子どもたちの学習意欲も湧くわけがありません。子どもたちにとって教師の表情は、教師が想像している以上に影響力のあるものです。教師の仕事は、目の前にいる子どもたちの意欲ややる気を呼び起こし、活性化させるところから始まります。だから、何よりも教師自身が元気で意欲的であり、表情豊かで、周りの子どもたちに活力を感じさせる存在でなければなりません。

子どもの話を聴くときの顔、姿勢、雰囲気、子どもに話すときの声の大きさ、声の質・高さ、話し方や間の取り方等をよく自覚して、授業の中で、的確にいろいろな表情ができることは、教師の授業力のとても大事な要素の一つです。普段、自分はどんな表情をしているか、また、子どもたちはどんなふうに分をみているのか、そういう観点から自分を改めて振り返ってみましょう。

2. 豊かな表情は授業に取り組む姿勢から

日々、自分の表情を意識することが大切だと述べましたが、しかしそれが上っ面だけのものであったなら長続きはしないでしょうし、やがては子どもたちに見抜かれてしまうことでしょう。では、どうすれば豊かな表情が継続的にできるようになるのでしょうか？

まずは、授業づくりに教師自身がワクワクし、内面的にとときめくことが必要だと思います。たとえば子どもに興味・関心を抱かせるためにどのような素材や題材を工夫するか、子どもに自ら取り

組む意欲を出させるためにどういう授業設計をするか等、まさに子どもに寄り添う意識と姿勢で授業を作っていくのです。授業のオリジナリティが高ければ高いほど、ときめき感やワクワク感が高まります。そしてそれが、教師の表情を豊かなものにしていきます。

もう一つは、子どもたちの声に耳を傾けることです。

教師が一方向的にアウトプットするだけの授業では、教師にとっての発見がありません。ですから、教師の表情も次第にマンネリ化してしまいがちです。

しかし、子どもたちの声を一生懸命に聴くように心がけ始めると、授業が面白いものを感じられるようになります。「ああ、こんなふうに思っていたのか」「なるほど、こんな考え方もあるのか」「おや、この子にはこんなよさもあるのか」など、たくさんの発見に出会い、感動をもらうことができます。子どもたちの発言や発想から感動をもらう。教師として一番うれしいことではないでしょうか。そんな時には、知らず知らずのうちに笑顔になっていることでしょう。

3. やりがい、そして生き甲斐

教師にとっての授業ということを考えてみると、「子どもたちの成長を支援することを通して、教師自身が自己実現し、成長していく場である」ということができるかと思います。ですから、子どもたちが授業を楽しんでいる姿を見たり、確かな学力を育てていることを実感したりすることは、教師自身のやりがいや生き甲斐を高めることにつながります。それが、教師の表情の豊かさに表れます。そして、その豊かな表情がまた、子どもたちに楽しい学びを提供していくことにつながっていくのだと思います。

●●● 現職教師の声

4年生の社会科で、三浦半島の気候や特色についての学習で導入に悩んでいたところ、先輩の先生から「三浦大根を見せればいいよ。」とのアドバイスをいただいた。早速、三浦の農家から取り寄せた三浦大根は、長さ60センチ、重さ6キロもあり、自分自身も驚いた。きっと子どもたちも驚くだろうと、とてもわくわくしたのを覚えている。この巨大な大根を見たら、何とかな、どうしてこんな大根ができたのか、そこから土地の様子や気候に着目できるかな…。とても楽しみながら教材研究ができた。

こちらが準備した学習に対して子どもたちがどんな反応をするだろうと思うと、自然に子どもたちの考えを聴くのが楽しみになる。予想していなかった考えに驚きや感心することも多い。そこから「ああ、この子はこんな見方をするんだ」と、児童理解につながっていくこともある。子どもたちが学習に集中して話し合いが盛り上がると私も楽しくなってくる。そのためにも日々教材研究を大切にしていきたいと思っている。

(30代女性・小学校)

おわりに

教育は、誰もが語れる。そのことはよいことであるが、時に、今日の教育とは異なる過去の教育に依拠することにもつながる。それは、自分の受けてきた教育を元に、今日の教育を語るからでもある。このことを、原体験に依拠した教育論という。

原体験に依拠した教育論を語ることは、必要である。しかし、過去を見るだけで、未来を見ることのない教育論を展開しても、これからの時代に生きる子どもたちに機能する教育を行うことはできない。「未来は、教育によって創られる」といっても過言ではない。学校教育で育成されなくてはならないのは、子どもたちがこれからの時代を生きていくのに必要な学力である。そのためには教師一人一人が、過去に学びつつも、これからの時代が求める学力を学校教育における授業で具体化することが大切である。ここに、教師の専門性が求められる。

「教師になる」ことで完結するのではなく、「教師として成長し続ける」ためには何をすべきか。今の学校で、何をすることが未来を生きる子どもたちのためになるのか。本書は、そうした問いに対する、一つの提案である。

この提案を実現するために何より大切なのは、若い教師や中堅の教師、さらにベテランの教師がそれぞれの役割や立場で一緒になって、チームとしての学校教育を行っていくことにほかならない。

私たち教育デザインセンターは、学校教育に関わる全ての方々と手を携え、新しい教育づくり、子どもたちが生き生きと学ぶ学校づくりのために微力を尽くしていきたいと考えています。

横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター長 高木展郎

「教師として成長し続けるために」

若手の先生に贈る 20 のメッセージ

2012年3月 発行

編集・発行 横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2
TEL・FAX 045-339-3481
E-mail edu-design@mlynu.ac.jp
印刷所 (有)中溝グラフィック

この冊子は、文部科学省特別経費「教育デザインセンターをハブとした都市型総合大学における教員養成システムの構築」事業の予算によって作成いたしました。